

令和3年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

市民の参加と協働を進める 多様なコーディネーション 実践研究集会2022

越境×対話×共創

コーディネーターがオンラインで
経験と知見を共有&習得する
“学びのプラットフォーム”

— 報告書 —

2022.2.23 水・祝 - 2.27 日

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会 実行委員会

は じ め に

1994 年にスタートし、1996 年から毎年開催してきた「全国ボランティアコーディネーター研究集会(JVCC)」。2021 年からは、対象とする参加者の活動分野や領域を広げ、「市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会」に衣替えをして、今回 2 回目の開催となりました。

主催の日本ボランティアコーディネーター協会は、2001 年の設立時より、ボランティアコーディネーターの「ネットワークの確立」「専門性の向上」「社会的認知の促進」を掲げてきました。そして、現在は、「ボランティアコーディネーションの機能を幅広く普及させる」ことにも力を入れています。これは、これまで積み重ねてきた「市民の参加意欲と行動力を引き出し、人や組織をつなぐコーディネーションの機能」が、現代社会の様々な課題、領域、地域で重要であることを確信したからにほかなりません。

今回も、前回同様、多様な現場で活動する実行委員で準備を進めてきました。約 3 分の 1 の委員は新たに加わっていただいたメンバーです。実行委員会は、対面での実施も数回は予定していましたが、結果的にすべてオンラインとなりました。集会もオンラインでの開催でしたが、前回よりもより主体的な参加を生むように企画を組み立てたつもりです。交流という点でも、オンラインでの難しさがありましたが、放課後タイムや交流会などの時間を設けてつながりづくりの工夫をしています。

なお、分科会について、A は異分野のコラボレーション、B はテーマで深める、C は動詞で表してボランティアコーディネーションに共通する機能やスキルなどを考える、という構成で組み立てました。

集会当日は、福祉、医療、保健、多文化共生、環境、教育、災害、助け合いなど、多様な場面で参加を進めるコーディネーターの皆さんに集まっていただくことができました。そして、それぞれの領域を超えて出会い【越境】、話し合い【対話】、協働しての新たな課題解決にむけた方策づくり【共創】について、学びを深めることができたと確信しています。おかげさまで、参加者の評価も高く、実りの多い会となりました。ここに、その報告書をお届けします。

それぞれの「参加と協働」を進める実践に、活かしていただければ幸いです。

2022年 3月

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会実行委員会
委員長 鹿住 貴之
実行委員一同

越境×対話×共創

目次

P.

- 01 はじめに
- 02 目次
- 03 開催概要
- 04 オープニングセッション

分科会

- 12 A1 福祉×地域 ～ごちゃまぜの世界～
- 14 A2 ことしもやるぞ！「生協×社協＝競争？共創？」連携で地域福祉を進めよう
- 16 A3 多文化共生×地域～地縁組織での取組から～
- 18 A4 若者×社会変革 Z世代のリーダー達に学ぶ
- 20 B1 大規模イベントでのボランティアコーディネーション
- 22 B2 「難民」と支え合い、学び合う
- 24 B3 もっと楽しくまちづくり、地域を元気にしたい人全員集合！！
ボランティアコーディネーション力を「地域運営組織」の運営に活かすには
- 26 B4 地域包括ケア、地域共生社会における市民と専門職との協働
- 28 B5 わがごとの災害
- 30 B6 団体の岐路に立ちあう中でのコーディネーターの関わりとは？
- 32 C1 「つなぐ」制度のスキマを埋める
- 34 C2 「あたためる」あたたかい場づくりのコーディネーション
- 36 C3 「提言する」市民の声を届ける
- 38 C4 「問いをたてる」ジブンゴトの切実な問いが対話と共創をうむ
- 40 C5 「学ぶ」活動に埋め込まれた「学び」の実践を振り返る

-
- 42 クロージングセッション
 - 45 オプション企画：前夜交流会・参加者交流会
 - 46 データでふりかえる 2022
 - 52 企画委員名簿・委員会開催実績

開催概要

日時 2022年2月23日(水・祝) 14:00~16:30

※26日(土)10:00 までオンデマンド配信

2月26日(土) 10:00~16:50

2月27日(日) 9:30~14:30

参加費 一般 6,000 円 二人目割引*5,500 円 JVCA 正会員・準会員 5,000 円

*同組織の2人目以降の方へ割引があります。

方法 Online (Zoom)

参加者 185名

主催 認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会 実行委員会

協力 公益社団法人日本社会福祉士会/日本生活協同組合連合会/特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JV0AD) /一般社団法人多文化社会専門職機構 (TaSSK) /東京ボランティア・市民活動センター/社会福祉法人大阪ボランティア協会/特定非営利活動法人ハズオン! 埼玉/一般社団法人生き方のデザイン研究所/特定非営利活動法人ぼらんたす

後援 社会福祉法人全国社会福祉協議会/社会福祉法人中央共同募金会/認定特定非営利活動法人日本 NPO センター/認定特定非営利活動法人国際協力 NGO センター/公益財団法人日本 YMCA 同盟/一般財団法人自治体国際化協会/一般財団法人児童健全育成推進財団/一般社団法人環境パートナーシップ会議/ESD 活動支援センター/認定特定非営利活動法人日本ファンディング協会/特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会

オプション企画：交流会

前夜交流会 2月25日(金) 19:00~21:00

参加者交流会 2月26日(土) 17:30~19:30

※参加費 無料/申し込み不要

国家と市場、二つの強いシステムが生活のすみずみまで浸透した現代の私たちの暮らし。それは便利な反面、孤立を生み、人が主体的に生きること、他者とともに自ら社会をつくることを困難にするという側面を持ちます。コロナ禍は、こうした現状をあぶりだし、あらためて「人が人とつながりの中で生きていくこと」の意味を問い直す機会となりました。

この全体会では、システムにくるることのできない人々の参加と協働による活動の意味と、それを生み出すコーディネーションの価値と可能性について、人類学と地域の実践から考えます。

どうすれば私たちは、他者との関係を紡ぎ直し、自由に、豊かに生きていくことができるでしょうか。キーワードは「越境」。

● 登壇者



松村 圭一郎さん 岡山大学文学部准教授

1975年熊本生まれ。岡山大学文学部准教授。専門は文化人類学。エチオピア農村部や中東の都市部でフィールドワークを行い、所有と分配、海外出稼ぎ、市場と国家の関係などについて研究。『うしろめたさの人類学』（ミシマ社）で第72回毎日出版文化賞特別賞。著書に『くらしのアナキズム』（ミシマ社）、『はみだしの人類学』（NHK出版）、『これからの大学』（春秋社）、『所有と分配の人類学』（世界思想社）など、共編著に『文化人類学の思考法』（世界思想社）、『働くことの人類学』（黒鳥社）。



松田 妙子さん せたがや子育てネット代表理事

渋谷区出身。工務店を営む祖父母と同居し、「まちのよろず相談の場」を見て育つ。こどもの城で働いたのち、結婚して夫の転勤先の三重県津市にて第1子が5ヶ月の時、「赤ちゃんサロン」を開催。「あいま通信」発行。2001年世田谷にて、子育て支援グループamigoを立ち上げて、産後家庭にアウトリーチ（家事援助）と常設の居場所を開始。2004年区内の団体ネットワークをベースにNPO法人せたがや子育てネットとして法人化。コロナ禍では「せたがやこどもフードパントリー」活動に取り組んでいる。



西川 正さん ハンズオン！埼玉常務理事

学童指導員、出版社などを経て、2005年、ハンズオン埼玉を設立。「おとうさんのヤキモタイム」キャンペーンをはじめ、さまざまな協働・市民参加型のまちづくりのプロデュースに関わる。地元では、PTA、民生委員、自治会、学童保育などにかかわり地縁と志縁の間を行き来しつつ、様々な実践と提案を重ねる。大妻女子大学等で非常勤講師。NPO法人あげお学童クラブの会理事、等。著書に『あそびの生まれる場所「お客様」時代の公共マネジメント』他。共著に『オンラインのあたたかい場をつくる自主研究ノート』等。

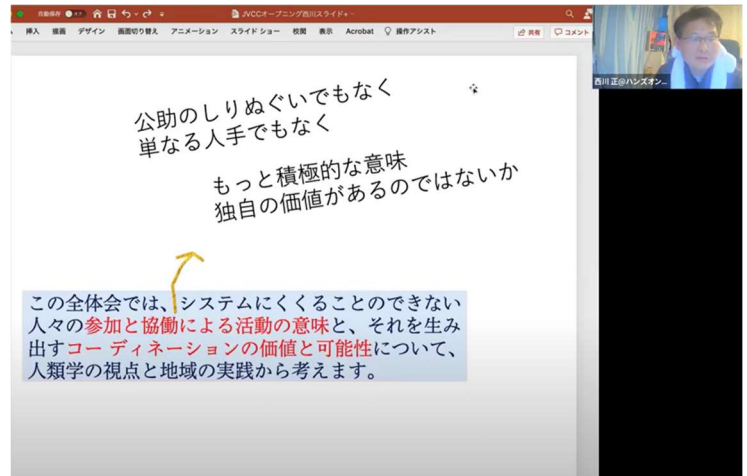
● オープニングセッションの内容

【西川正さん お話】

システムが整うと生活は便利になる一方で、孤立を生み出すのではないかと。例えば、共同保育では保護者同士でつながって主体的に困りごとを共有し解決を目指す。言い換えると、自治＝自分たちで変えることができる。しかし、システムが整いサービスとして保育を提供できるようになると、保護者同士の関係が途切れ、孤立していくため、何か困りごとがあるとサービス提供者への苦情という形になる。自分たちでは変えられないということになる。

また、公助が足りないから共助をせざるを得ないという文脈で子ども食堂や災害ボランティアが語られる場合がある。その側面も確かにあるが、共助には、公助のしりぬぐいでもなく単なる人手でもなく、積極的な意味や独自の価値があるのではないかと。

そんな、システムからはみだし（越境した）人々の参加と協働による活動の意味を考えていきたい。文化人類学の観点から越境することの意味を松村圭一郎さんに、越境を実践されている立場から松田妙子さんにお話を伺う。



【松村圭一郎さん お話】

2016年熊本地震での経験

2016年の熊本地震で、熊本市の実家にいた母親が被災した。母親は近所の人々の助けで避難所である中学校へ避難したが、多くの人々が押しかけた結果、避難所の機能が麻痺してしまった。学校の先生や行政の担当者が運営しようにも、その人々自身も被災しているため、誰がリーダーシップを取れば良いかわからない状況であった。そんな中、ある男子中学生がトイレの水を流すためにプールに溜まっている水をバケツで運べばいいと提案した。大人たちがその声に促されて、みんなでバケツリレーを行った。また、近所の居酒屋の店主は、停電で冷蔵庫にある食材が腐ってもしかたがないと自発的に炊き出しを行った。このように災害時には、誰かが指示を出して動けるわけではないため、気付いた人が率先してできることをやっていくしかない。

また、地震の数日後、市内で雨の予報が出たが、家の屋根の瓦が崩れてしまったため雨漏り対策用のブルーシートが必要になった。母親は市役所に電話をかけたが、つながらず結局ブルーシートは手に入らなかった。一方で、近所の人たちの中には知り合いからブルーシートを手に入れている人がいた。行政からの一律な支援を待つよりも、知り合いとの助け合いの方がより効果的であったが、それは日頃からのつながりがなくてはならない。

エチオピアでの経験

研究のために20年近く通っているエチオピアのコンバ村では、住民たちは行政の手を借りずに生活を自らの手で成り立たせている。電気もガスも水道もないが、野菜や家畜を自分達で育て、家や柵などを自分達で補修する方法を知っている。さらに、人間関係のトラブルがあっても、信頼する第三者に仲介してもらい話し合いをすることで解決をしたり、病気になった場合にも薬草や呪術の力で解決したりする方法を知っている。彼らは行政に頼らずとも生活できるどころか、むしろ彼らにとって国家は税金を取り立てるだけで何もしてくれない邪魔な存在ですらある。



コロナ禍の生活から

感染の急拡大により、保健所や医療体制の逼迫が起こった。これにより、自宅で療養せざるを得ない人が出てきた。端的にいうと、国家のシステムが機能しなくなってしまったのである。世界最大の感染症対策機関をもつ米国でさえ、多くの感染者や死者を出してしまっていることに鑑みると、もはや国家のシステムが感染症のような緊急事態に対処することには限界がある。全国一律の対策よりも、自治体や組織ごとの対応が重要になってくる。

こうした問題はコロナ禍以前にも存在しており、いくら国や行政が政策を行ったとしても、そこから抜け落ちてしまう人がある。例えば、ある小学一年生の男の子が卒園した保育園の先生に助けを求めた事例がある。その子はおばあさんとくらしているが、そのおばあさんが病気で、生活が成り立たなくなってしまう時に唯一顔が思い浮かんだのが保育園の先生だった。保育園の先生に助けを求め、その先生が行政のサービスにつないでくれた。一部では、越権行為だという批判もあったが、その男の子自身や病気のおばあさんが自分で行政にアクセスすることは難しいことを考えると、先生がつないでくれたおかげで生活が守られたのである。制度ができたなら、問題が解決するわけではなく、制度と困っている人とをつなぐ人がいるおかげで、国家の政策がはじめて機能するようになる。

生活者だからできる「政治」

そもそも、政治がくらしから遠く、政治は国や政治家がやることだと感じてしまうと市民は政治に興味を持てなくなる。しかし、生活者だからこそできる政治があるのではないか。人類学者のデヴィッド・グレーバーは、「多数決はコミュニティを破壊しかねない」と言っている。多数決によって政策を決めると、つねに少数派が敗者となり分断を生み出してしまうからだ。基本的には、みんなが当事者として納得することが重要なのである。これは、一見すると大規模な社会では難しいのではないかと思えるが、世田谷区の下北沢駅前開発のような成功例も存在するため、不可能ではない。

政治をくらしに取り戻すために、国家ではなく市民がやれる「政治」を考えることが大切だ。例えば、村瀬孝夫氏は「老人介護などの日本の福祉活動は民間の社会活動から生まれて、何年も遅れて後から国家が追いかけてきた」と言っている。また、指導している学生の調査によると、岡山市内のある古着屋では閉店間際に常連たちが集まってきて服を買わずに談笑するのが通例になっているらしい。小さい店で店主一人で回しているのだが、ここが実際に若者たちの居場所になっている。もし行政が若者の居場所作りをすることとなってもおそらく人は集まらないだろう。しかし、小さい古着屋だったからこそ古着好きな若者たちの居場所になったのである。

こうした本来の商売からはみ出した小さい動きというのは、誰もが作り出せる政治である。行政はルールや前例を守り、一律であることにこだわるために助けられない場合があるが、小さい動きであれば臨機応変に対応できる。それが無数にバラバラに存在すると結果として大きくなっていく。

国家・市場・社会のはざま

最後に、例えば電車の座席に誰が座るべきかという問題を考える。もし、国家が決める場合は、優先する人の基準を設けて審査をして、その人だけが座れるパスを発行するかもしれない。ただ、それは人員やコストが膨大になってしまうし、基準からもれる人がでてくる。一律のルールで現実の複雑さを扱うには無理がある。もし、市場が決める場合は、高い値段を払える人が座れるようにするだろう。この場合、お金がない人は体が弱い人であっても立つことを選ぶかもしれない。この方法は一見機会は平等に思えるが、根底にある不平等を解消できな

国家・市場・社会のはざま

- ・電車の座席に誰が座るべきか？
 - > 国家：優遇者を審査・監視
 - 人員・コストが膨大+基準あいまい
 - > 市場：高い値段払える人
 - 払えない人は我慢？+客意識
 - > 社会：その場でそのつど判断
 - 顔色を見たり、その場の状況ごとに臨機応変に判断=見えにくい

例) 無人駅での車椅子利用→誰の責任？

※いずれも限界/もれがある→社会/市民の力の可視化
→国家・市場の動きへの自覚芽生える=圧力・監視にも

『うしろめたさの人類学』
(2017, ミシマ社)

い。では、社会のなかで私たちは現実はどうやっているのかというと、その場でその都度、状況をみながら対応している。制度やルールを決めないからこそ、若者だけ顔色が悪いとか、荷物が重そうとか、柔軟に対応の余地が生まれる。以前、無人駅での車椅子利用に対して、車椅子利用者と電車の会社に対して批判が集まったことがあった。この批判に抜けている視点は近くにいた客の存在である。近くにいた客がちょっと手を貸せばすむ話だったが、そうした社会のなかのちょっとした動きは見えにくいため、あまり意識されない。鉄道会社か当事者本人が対応することしか話題にならなかったが、その間にいるふつうの人の可能性も視野に入れたほうがいい。

現場で柔軟な動きが自発的に起こるようになると、何が制度として必要なのかも自覚できるようになる。単に共助が公助をバックアップするのではなく、共助によってどんな公助が必要なのかが明らかになってくる。それは結果として、国家や市場に対する圧力や監視にもつながるのではないか。

【松田妙子さん お話】

「いまある支援」と「広く深い予防」をもっと

東京の渋谷区育ちで、実家のおじいちゃんが大工さんでおばあさんが民生委員をやっているような家で職人さんや近所の人が頻繁に出入りする場所で育った。この経験が今の活動の原風景となっている。1998年に夫の転勤で三重県津市で子育てをする中で、「知らない土地での子育て」支援の必要性を実感し、ママの部室「赤ちゃんサロン」を開催した。その後、東京に戻り、2001年に世田谷で地域子育て支援活動として家事援助や常設の居場所作りなどを行っていたところ、それが事業になった。現在は、世田谷にある小さくバラバラな活動をつなげるためのネットワークづくりとして「せたがや子育てネット」を運営している。

地域の状況は、まだまだ地域の中で困窮している人たちが多いのが現状である。特に、子どもを持つことは、本当は喜ばしいことであるにもかかわらず、リスクになってしまっている。たまたま見つけてもらえた人は助けてもらえるが、他の困っている人を支援するにはどうすればいいか。それは、困ってから救助浮き輪を投げる社会ではなく、全ての人にライフジャケットが配られている安心の社会を作ること。ただし、どのようなライフジャケットを配るかはみんなで話し合うことが大切だ。

もう一つ大切なことは、「子育ては大玉おくり」という考え方だ。地域のみんなが当事者意識を持って協力する必要がある。ただし、ただ子どもたちは守られるだけの存在ではなく、子どもたちや若者自身も参画することで、いろいろなシーンで支えられる側や支える側になりうる。しかし、ここで課題になるのが、そもそも地域とは誰のことだろうかということである。例えば、小児科の先生が「心配な患者さんは地域につないでいる」と言っていたが、そこで意味する地域とはどういうことか尋ねると、「子ども家庭支援センター」だと答えた。さらに、子ども家庭支援センターの職員さんにも尋ねると、「民生委員や町内会」だと答えた。私たち地域の当事者と彼らとの間にある地域のイメージにはギャップがあるため、そこを埋めることから始めないといけないという問題意識がある。もっと言えば、見張られているという意識から見守られているという意識に変えることが重要で、プロテクト要因がリスク要因を上回っていれば、総合的にレジリエンスが高まるということだ。

アウェイ育児

ただし、実際は自分の育った市区町村以外で子育てしている「アウェイ育児」の割合が非常に高いという現状がある。このアウェイをホームに変える手伝いをしたいと思っている。例えば、実際にやることはなんでもないことだが、産後の家庭にご飯を作りに行くことや赤ちゃんをお風呂に入れる手伝いといったくらしの手伝いをしている。これをサービスにしてしまうとお互い大変になってしまう。良い塩梅で手助け方やその受け取り方を探ることが大切である。もちろん、一人ではできないので、同じ気持ちを持っている人が取り組みに参加できる仕組みやコーディネーションは必要だ。結界の綻びを繕う小さな仕事として、目の前の人の「ほっとけない」に気づき、アクションすることがことで、虐待の発生予防にもつながる。

具体例の一つに、腰痛や腱鞘炎になってしまうなどの悩みを抱える人向けに抱っここの仕方を教えるプロジェクトがある。今の世代にその方法を教えることで、次の世代にも伝わっていく。ただ、こちらが抱っここの方法を押しかけても当人はやってくれないので、どうすれば食いつくかを模索している。この取り組み自体は個別に行っていることだが、その方法を教わった人が別の場所で別のの人に教えることで地域が変わっていく実感がある。また、地域子育て支援拠点事業として世田谷区お出かけひろばを行っている。ここでは、ハレとケがあるとしたら「ケ」の日常を紡ぎだす場を作っている。利用者の中にも社会経験が豊富な方がおり、スタッフやボランティアとも対等な関係で接している。世田谷区地域子育て支援コーディネーターとしては、予防的にちょっとした悩み事にも傾聴して伴走したり、その困りごとにある支援と一緒に探す「逆引き辞典」的存在になったりしている。

誰でも来られる広場に、困っていなくても日常的に来ている人は、いざ困りごとができた時に相談相手のいる割合が高い。つまり、困ってからではなくて、日常でつながっている人の方が、役所の支援といった敷居の高い場所へ行ける割合も高くなる。こうしたつながりを生み出す場を誰もが来られるよう敷居を低く開くことが大切である。



せたがやこどもフードパントリー

コロナ禍で給食が無くなった時期に、子どものご飯代が負担になってしまう家庭が増えたため、お弁当を配る活動をした。最初は、食を配る行為は施しのように違和感があったが、まずはやれる範囲で行ってきた。まるで大人の部活動という形でいろんな方が協力して実施することができた。この活動を通してつながれたこどもは少ないが、その中で情報提供をもらったり、世田谷区お出かけひろばへの参加につながったりした。当初は、食の支援は「対処療法」的なものだと考えていたが、新たなつながりができたことで孤立を防ぎしかるべき支援につなぐことができる「予防」になりうることがわかった。

【対話パート】

松村さん>行政などが行う政策はある目的を達成するために実施するケースが多いが、松田さんの事例では、その目的を達成するだけにとどまらないつながりが生まれている。逆に言えば、私たちはつながりを無くして悩みを共有できない状況をむしろ積極的に作り出してしまっていると感じさせられた。行政が作った専門組織が悩みを解決するのではなく、その対極にある市民が臨機応変に対応していくような、まさに「くらしの中の政治」の実践例だと感じた。こうした活動を実践していくにはゆとりや余裕が大切だという人も多いが、実際は何が大切なのか。

松田さん>私たちは呪われていて、余裕が生まれることはないのではないかと思う。ただ、やっている方が余裕が出るのではないかという気がしている。よくやりすぎて人から言われることはあるが、それはやりすぎてみないとわからない。なので、やってみることが大切。あとは、やっていいか聞く人がいるが、聞かずに怒られるまでやってみればいい。もちろん公序良俗に反することはダメだが、目の前の気づいたことをやれば良いと思う。それが結果的にボランティアになるし、場合によっては仕事にもなる。

西川さん>ボランティアをするとつながりができてくる。そのつながりが自分を助けてくれたり、誰かを助けることができたりする。つながると、心の余裕ができてきて、孤立したお客様でなくなっていく。また、松村さんの民主主義の話で、みんなが当事者になることの重要性について話されていたが、現実には当事者だという感覚のない人が量産されている。ただ当事者になれと言っても通じないだろうが、それを

伝えるにはどうすれば良いか。また、「越境」がこのセッションのキーワードだが、地域の活動でも、専門職でもよくあるのが「これは私の仕事ではない」と閉じてしまいがちだ。どうすれば良いか。

松村さん>生活が互いに閉じてしまうことの問題は、隣の問題と自分の問題が途切れてしまうことにある。エチオピアでは喧嘩がよく起こっていて、このことを最初はネガティブに捉えていたが、逆に言えば、問題が可視化されているということ。可視化されていると、その喧嘩は周りの人も巻き込むことになるため、巻き込まれた全員が当事者になる。松田さんのように動く人はいろんな困りごとに巻き込まれる余地がある。一方で、全てお金でサービスを買うようになった社会では、他者のトラブルに関与する余地がなく、そこだけで完結することになる。松田さんは具体的に他者が抱える問題にどう巻き込まれるのか、もしくは巻き込んでいくのか。

松田さん>本人が困っていると気づいていない人の方が多い。それでうまくいくならそのままでいいが、今後問題が起きそうなら予防的に関係を作っておく。本人が気づかなくても周りの方が困りごとに気づく社会や、困った時に相談できる関係性を普段から作っておくことが大切。

西川さん>「他人に迷惑をかけてはいけない」と思っている人は支援につながりにくい。そういう人が増えているのが今の社会ではないか。松村さんの著書『くらしのアナキズム』に「日本でよく耳にする他人に迷惑をかけてはいけないという言葉。エチオピアの人々の振る舞いを見ていると、その言葉がいかにものを否定し抑圧してきたのかがわかる。人間は他人に迷惑も喜びも悲しみも怒りもいろんなものを与え受け取って生きている。それをまず肯定することがもれる社会への一歩だ」とあるが、具体的にどういうことか。

松村さん>エチオピアでは常に問題が起きていて、例えば夜中にこどもが大きな声を出して泣いている時に、近所の大人が集まってくることがある。こどももそれをわかっていて大きな声を出していると思うが、親子間だけでは解決できないことは周りを巻き込んで解決している。日本もかつてはそういう時代があったはずだが、時代が変わってきているため、他人に迷惑をかけてはいけないという言葉を抑え直す必要がある。おそらく、この言葉が使われていた文脈が時代で異なっていて、昔は互いに助けあうことが当たり前だったなかで、マナーとしてこれ以上迷惑をかけてはいけないという意味だったのが、今は自己責任を前提として、一切の迷惑をかけてはならないという意味になっている。この違いを私たちは自覚しなければならない。

松田さん>小さいコミュニティで練習しないと、他人に迷惑をかけたり自分をさらけ出して悩みを打ち明けたりすることはできない。小さい場をたくさん作っていくことが大切になってくるのではないか。

西川さん>松村さんの著書の中で「仕事は贈り物」という言葉があったが、市民活動にせよボランティア活動にせよ仕事にせよ、「誰のために」や「この人と一緒に」という形に作り直すことで対話が生まれてくるのではないか。最後にお二人から一言。

松田さん>自分の子どもが小さい時に、あるお母さんが菓子折りを持って訪ねてきたことがあった。話を聞くと、子どもたちが100円のマシュマロを買って炙って食べたことのお返しだった。通常はお返しにはタイムラグがあるはずだが、速攻返却されてしまっていて恐縮してしまった。この経験から、お互い様や等価交換ではないということをもっと伝えなければならないと感じた。昔は受け取った恩はいつか返すという感覚でくらしていたのが、現代はもらったらすぐ返す、すなわち交換になってしまっている。

松村さん>それはまさに人類学のテーマだが、贈り物は関係をつくる意味がある。だから宛先はかならずしももらった相手ではなくても、別の次の人に渡してつないでいくことも大事だ。即座の返礼は、まさに交

換になってしまう。自分の提供できるものを必要としている人に渡し、もらった人がまた別の人に何かをできる範囲で提供していくような循環していくことが社会環境を耕すと思っている。

西川さん>その循環を作っていくのがまさにコーディネーション。災害の話があったが、公助ができない状況下に直面すると、みんなで持ち寄って物事を作っていくことが自然に発生してくる。そのため、災害の現場に適切なコーディネーションがあれば、「しんどい」状況が、個人や社会への信頼につながるチャンスにもなるとも言える。

それぞれの経験や考え方を持ち寄って話ことができました。ありがとうございました。



● 参加者の声

- ・一番印象に残っているのは「小さい事の意味」。人と人が出会う場、つながる場とは、小さい場が良いのだという「古着屋さん」の話。大きな組織として考える時に、参加人数の多さや大きな仕掛け、対象を大きくと考えがちだけど、その考え方の落とし穴に気が付いたような気持ちになりました。
- ・話を聞いて、ワクワクうずうずしました。事例がたくさんある松田さんの話、なるほど～と共感できる松村先生の話がとても楽しかったです。
- ・もっと聞きたいお話ばかりでした。もやもやとしていた個人的な思いや、仕事上の思いをやわらかく昇華してくださるような内容で、ゆるやかに越境していくためのヒントをいただきました。ありがとうございます。
- ・困りごと＝人と出会えるチャンスという言葉がとても印象に残りました。いつも困った事が起きるとただ困って終わるのですがそんな風にポジティブに考える事ができるのかと目から鱗でした。
- ・盛り沢山の情報の中から、自分の地域に合った、周りを巻き込める活動のヒントをもらえたと思う。
- ・もらった人には返せない。次の必要な人に返す循環こそがコーディネーションなんだ。というお話。響きました。ありがとうございました。
- ・松田さんの「やっていい？って訊かないで、聞かれたら検討しなくちゃならないから、とりあえずダメって言われるまでやってみて！」というのが印象に残ってます。
- ・報告者のお話がどれも興味深く、様々な活動が有機的に繋がっていている様子を感ずることができました。こういう世界もあるんだなと思えたのが良かったです。

- ・日本は都市化で大都会に住んでいる人が大半なのに逆に孤立してきているのが課題だとは思っていました。松村先生の「エチオピア」はある意味「近代化、都市化する前の日本」でもあって、便利さ追及の中の社会の専門化細分化が孤立を生んでいるんだよね、と、そんなことを思いました。
- ・はみだす市民の動きは多様な人のつながりを生み出す「よゆう」があり、行政のシステムは対象者へ直接つながり、個々の横のつながり難さがある。行政による制度は必要なのですが、制度で整えられた社会に頼り切ってしまうと、人のつながりの必要性を感じなくなってしまう。市民による自律的な「小さな」動きが、制度で整えられた社会に横ぐし刺していくのだなと思いました。
- ・西川さんの軽快なお話、余計な事をして仲良くなろう。結果や効果でなくつながりを生むこと。中学生のスマホ教室の別のエネルギーをもらっている女性のことなど、考え方に共感します。また松村先生の、震災の話から、改めて国や自治体がどうにもならなくなるのが災害で、どういうネットワークを作っておくかということ。避難所が靴で汚れていたとか、考えるところが多かった。全国一律で抜け落ちることをどうつなぎとめるか。松田さんのパワフルな活動はまぶしい。でも小さなはみだしの場ならだれでもできるという最初の西川さんのお話に戻り、元気をいただいた気持ちです。 ありがとうございます。
- ・お話のなかで、手許に残しておきたいことばがたくさんありました。一人一人の、ささやかで茶目っ気のある「はみだし」行動が、きっと閉じた社会・生活に隙間をつくり、ゆるく人が関わり合うことにつながるのだろーと思いました。ありがとうございます。
- ・松村さん、松田さん、西川さん、ありがとうございます！三人の知識と実践の場面が違う中で重なり合う価値が後半に加速してキーワード化され、とても刺激をもらいました。そしておもしろかったです。エチオピアにまだあり、日本が失っているもの、環境の違いで同じ文化の発展にはならないと思いますが、気づいた私たち自身が社会のなかで堂々とはみ出し、越境をつくっていく必要があるし、それをサポート、コーディネートする必要があると思いました。
- ・西川さんと松田さんの実践からの示唆と松村先生の話が見事に混ざり合って、いい感じのセッションでした。もっと聞いてみたかったといういい余韻もありました。登壇者のみなさまから頂いた贈り物を誰に渡そうかな。ありがとうございます。
- ・たくさんのキーワード、考え方を教えていただきました。足りないから動き、課題を発信し、それが制度化されていくことで解決されることもある一方で、そこに利用者と提供者という考え方が生まれてしまうという事にハッとしました。保障の見直しの考え方は公助が基本で共助そして自助という考え方ですが、くらしは共助として自分たちの力で切り開いていくこと、それでもできないことを公助で…という考え方になるほどと思いました。「自分がジャッジされているように見られる」「手助けも受け取るのも難しい世の中」「自己責任をベースとした人に迷惑をかけてはいけないという考え方」に納得。「恩送りの気持ち」は大切に素敵だと思いました。
- ・全体を通して、うなずけることばかりで、尚且つ柔軟な発想でうまれた様々な事例を伺えて、とても良い時間でした。「小さくバラバラだけど、無数にあることで、それはデカイ」、そういう繋がりや場づくりのきっかけをつくることも、ボランティアコーディネーションのひとつだなと思いました。
- ・「ボランティアをすることで余裕が生まれる」というのはまさに感じていて、今の自分を支えてくれているのは過去のボランティアで生まれた繋がりだったり縁だったり、それがあつて感じられる「どうにかなるか」という気持ちだったりします。
- ・恩送りの社会、半径1キロメートルの範囲で自分ができることはなんだろう？と思いを巡らせました。御三方のお話を聞いて、地域で新しくやりたいことが増えました。背中を押してくれる対談でした。

● 企画担当者

鹿住貴之（JUON（樹恩）NETWORK）/西川正（ハンズオン！埼玉）/早瀬昇（大阪ボランティア協会）
/後藤麻理子（日本ボランティアコーディネーター協会）

A1

福祉×地域 ～ごちゃまぜの世界～

誰もが当事者として参画できるコーディネートを目指して

地域の中では制度に則り、「高齢者の」「認知症の」「子どもの」など、対象者を絞っての居場所は数多くあります。一方、地域住民（市民）が関わり、対象者を定めないボーダーレスな居場所も、改めて近年、増えてきているように感じます。そこで、今回、専門職と当事者だけでなく、様々な人々が集う居場所、ごちゃまぜの世界を創り出している団体に焦点をあてました。多様性社会創造に向け、自己、他者との垣根を超え、市民や当事者が参画できる環境をコーディネートしている方の発表を中心に、参加者同士の対話も加えごちゃまぜにし、学びを深める分科会です。



● 登壇者

事例提供者 宮田 隼 さん（コミュニティハウス「ひとのま」 代表）

ファシリテーター 神谷 牧人 さん（株式会社アソシア 代表取締役）

● タイムスケジュール

- 10:00 開会、オリエンテーション、講師紹介
- 10:15 登壇者自己紹介
- 10:20 グループワークⅠ（自己紹介）
- 10:25 宮田さんの発表
- 11:10 神谷さんと宮田さんの対話
- 11:35 グループワークⅡ（意見交換）
- 11:40 全体共有、質疑応答
- 12:10 閉会

● 参加者数

46 名

● 分科会の内容

【宮田さんのお話】

1、どのような人が集って何をしているのか？

不登校の子どもたち、ホームレスの人、出所者の人、近所の人、自分の子どもなど、近隣だけでなく、ひとのまのことを耳にした人が様々な地域から来ています。“助けます”という「支援者臭」が嫌で、相談機関等に行かなくなる人も多いみたいです。ここでは、特にルール決めをしている訳ではなく、そこにいる人同士で自然発生的に、企画や〇〇の会などのグループが出来ます。また「みんなでごはんを食べる日」「バス旅行」など、それを必要とする人がいれば、状況に応じて開催しています。他にも、生活保護制度を利用しようにも、引っ越しや生活用品準備を一人で行うことは難しいため、過渡期の滞在場所としてひとのまの2階を利用してもらったり、実際に移動する際には、ひとのまに来ている子どもたちが力を貸してくれたりします。このように、その人がどうという背景をもつ人だとしても、その場で、対等な相互の関係性が育まれる場所となっています。

2、なぜ「ひとのま」という居場所をつくったのか？

個人塾をゆるやかに運営している際、不登校の子どもたちと出会うことができました。そこで、引きこもりがちの方の「居場所がないから居させて欲しい」という申し出を受けたところ、口コミが広がり、多くの“居場所を必要としている人”と出会うことになりました。そこで、それほどまでに居場所を求めている人がいるのであれば「とりあえず家、借りてみるか！」と、一軒家と空き地を借り、ひとのまを立ち上げました。

3、宮田さんの想いは？

ひとのまに集う人々に「友だち」位の感覚で接していて、出来ることは協力するけれど、出来ないことや「面倒だな」と思うことは断ることもあります。解決するというよりも、一緒に考えようというスタンスで、自分自身の価値観は狭く、自分が良し悪しを判断できる立場にはいないと考えています。活動の話をするすると費用面についてよく聞かれます。払える人は1回300円を払ってもらいますが、払えない場合はそれはそれで良しという姿勢で、その他、寄付等で賄っています（回る限りは）。これからは敵をつくらず、やれることをやっていきます（やる気満々という訳ではなく）。

【神谷さんのお話】

1、なぜ株式会社なのか？なぜ福祉を志したのか？

デンマークで福祉施設を見学した時、そこがとてもオシャレで「入りたい！」と思える場所だったことが契機です。それまで福祉職として、入居施設などを勧めていましたが、自分が「入りたい」と思うような場所では無かったため、「入りたい」と思える場所を作りたいと考え起業しました。オシャレに拘る理由は自分自身の成育歴にも関連していると考えていますが、起業当時は若かったため、誰かと組んで借金をして起業するのでは無く、全て自分で責任を負う覚悟だったため、株式会社にし、僕は多額の借金と共にスタートしました。

2、神谷さんからのキーワード

- ・ **資本主義的社会主義**：デンマークでは税金は消費税ではなく所得税にかかっています。これは、ひとのまの“払える人は払う”というかたちと似ていて、これからの社会の在り方を示唆しているように感じます。
- ・ **評価しない**：支援者は得てして「～しなさい」「～したら良い」と伝えることがあると思います。そこには一種の正しさがあります。しかし、宮田さんは自身の価値観、個人との付き合いにおいて「面倒くさい」などと伝えており、相手を評価していないのです。
- ・ **社会構成主義**：社会は人がラベリングすることによって構成されていくという考え方です。バイクを大音量でふかして走る人々を、社会が“暴走族”と呼ぶので、そのような行動をする人は暴走族とカテゴライズするから、そう呼ばれるのです。その人を大人がラベリングしていることに気付かなければなりません。
- ・ **自己理解と自己開示**：自分自身のコンプレックスを認め、それをさらっと開示できれば多様性を受け入れられると思います。

● 参加者の声

- ・ 理論化するのが仕事なんですけど、安易な理論化なんてしちゃいけないということがよくわかりました。お二人の組み合わせもとてもよかったです。
- ・ お二人のお話、目からウロコ以上のものがありました。行政じゃないからできることなのかもしれませんが、行政や社協が、支援する側としてではなく、友だちまではいかなくとも、地域に住む隣人と思い接していただけると、もっと生きやすい世の中になるだろうと思いながら、お聴きしました。枠を超えること、ごちゃまぜになること、みんなで目指したいですね、やる気を見せずに笑。
- ・ ラベリングしない、評価ジャッジしない、自己理解→自己開示など、とても心に響くキーワードを頂きました。

● 企画担当者のコメント

とにかく刺激的な時間でした。スプレッドシートを活用してグループワークを行ったことも新しい試みでした。参加者から「生き方そのものがソーシャルワーク」という感嘆の言葉が聞かれ、本当にそう思いました。宮田さんの言葉「来る者拒まず、去る者追わず、去る者結構帰ってくる」には笑わせてもらいました。そして来る者の中に行政の方々もいて10年の月日が確かな実績と信頼を生み、さらなる事業の拡大のお話が聴かれたのもうれしかったです。神谷さんの事業の広がりや重なりこれからも楽しみです。自分の「支援臭」を考えるよい機会になりました（笑）。

● 企画担当者

佐藤正枝（日本社会福祉士会）/仙波愛優佳（和光市社会福祉協議会）/宮城智広（鶴ヶ島市社会福祉協議会）

A2

ことしもやるぞ！「生協×社協＝競争・共創？」

連携で地域福祉を進めよう

地域福祉を向上させるためには、その地域の多様な組織が連携し協働する必要があります。昨年は生協と社協の「越境、対話、共創」をテーマに、窓口間のコミュニケーションと相互理解の重要性を提起しましたが、今年度は、さらに深掘し、「新たな仲間づくりのポイント」や「窓口間の関係を組織間の関係構築に広げる方法」、「構築した関係性を継続させるために必要なこと」等を「市町村域」と「県域」の2つのレベルにおける「組織間のコーディネーション」を中心テーマに参加者とともに考えました。



● 登壇者

事例発表者 徳永 雄大 さん（長野県社会福祉協議会まちづくりボランティアセンター主任）
 中谷 隆秀 さん（長野県生活協同組合連合会 事務局長）
 小藪 真彦 さん（西宮市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター）
 藤井 智生 さん（生活協同組合コープこうべ 第2地区本部 マネジャー）

ファシリテーター 文珠 正也 さん（日本協同組合連携機構 協同組合連携1部 連携推進マネジャー）

● タイムスケジュール

10:00 オリエンテーション
 10:05 分科会テーマ説明
 10:10 チーム西宮 事例報告
 『コープ（生協）×社協 連携・協働・そしてその先に』
 10:35 チーム長野 事例報告
 『ことしもやるぞ！ 「生協×社協＝競争？共創？」
 ～連携で地域福祉を進めよう！～』
 11:00 問い・ポイント確認・まとめ
 11:20 ブレイクアウトルーム 質問会（1回目）
 11:35 ブレイクアウトルーム 質問会（2回目）
 11:50 共有の時間 各ルーム報告
 12:00 まとめ
 12:10 放課後タイム
 12:30 終了

● 参加者数

30名

● 分科会の内容

この分科会は昨年度も同じテーマで生協と社協が連携することは地域福祉だけではなく、災害時の支援においても力を発揮することや、新型コロナの感染拡大で困窮する大学生の食の支援では、窓口となる職員間の信頼や

なんでも相談できる関係性が、柔軟な発想と迅速な対応を実現した事例の紹介を行い、参加者から共感と高評価をいただきました。しかし、窓口間の関係づくりや組織と組織の関係づくりまでは、時間の関係で十分に伝えることが出来ませんでした。そこで、今年度は昨年伝えきれなかった点を深掘りし、その後の活動を追うというコンセプトでこの分科会を企画しました。

分科会では、まず、西宮チームから昨年紹介した学生応援プロジェクトが、学生が地域につながるきっかけになり、新たな活動が生まれたことや支援活動を大学同窓会（OB）が引継ぎ、新たな仲間が継続していることなど、その後の展開を報告。「生協も社協も根っこはつながっている」、高齢者の見守りや集いの場づくり、フードドライブ等共通するところで協定を結び、互いの強みや資源を共有すると「経費は半分で、人の広がりには倍になる」と伝えました。また、組織と組織に広げるためには上司や所属長が鍵になるので、上司や組織のトップを紹介し、関係づくりを意識することで、事業とのつながりを実現できると報告。また、組織全体へ伝えることも重要で、組織内インフルエンサーになることや相互理解を進めるための職員の合同研修などにも今後は取り組みたいとこれからの抱負も紹介しました。

そして、長野チームからは「今年もつながりは広がっている」として、災害ボランティア講座を開催し、コープの取り組みを共有。顔が見える関係を作ったことや「コープは支援先がわからないが、社協は支援先があっても物資がない。連携することで食品ロスの削減や困窮家庭の支援が実現できたこと」などを紹介し、組織の強みと弱みを合わせると相乗効果が発揮できた事例を報告。継続するには「つながりを“かたち”にする」ことが大切として、今年3月に両方で「包括連携協定」を結ぶ予定と報告しました。また、互いの思いは同じなので「まずは声をかけてみる（勇気を出す）」ことが大切だとし、そして顔が見える関係よりも、「何かを協働で取り組んだ経験が、組織がつながるうえでは重要であると伝えました。

グループワークでは、「最初から仲が良かったわけではなく、風土の違いを受け止めて、対等な関係を構築することを意識し、回を重ねて信頼関係を構築する。」（長野）。「フラットな関係づくりで、（企画書が）余白の段階で相談することや組織合意をとるための作戦会議も必要」など参加者へアドバイスし、このような動きで、つながる楽しさを実感できる。」（西宮）等、示唆に富むワードが沢山飛び出しました。

● 参加者の声

- ・連携のきっかけや連携した後の継続のしかた、個人から組織への広げ方等もろもろ、ヒント・糸口をたくさんいただきました。できることがたくさん、選べるほどあると感じたので、とてもよかったです。
- ・未知の世界である生協とのつながり方がわかっただけでなく、他の団体・組織との連携の考え方の学びにもなり、一石二鳥でした。
- ・すぐに使いたいアイデアが5つ、もやもやの解決が5つ、難しいけど重要なことの気づきが2つ、はっきりとありました。
- ・登壇の皆さんから、一緒にイキイキと楽しく取り組まれている事が伝わってきて本当に素敵だと思いました。
- ・社協や生協の果たす役割がよくわかった。“社協×生協”の無限の可能性を感じました。
- ・2年目企画でしたが、「その後」を聞くことができ、更に昨年の内容が深まったように感じました。

● 企画担当者のコメント

- ・生協×社協が、顔が見える関係から組織どおしのつながりにも広がっていることを感じました。（熊谷）
- ・たくさんのお名前が聞けました。究極的には「愛」なのですね。分科会はまだ少し私の進行が上手ければ、参加者の皆さんからの名言も聞けたと思うのですが…（薦）
- ・たくさんのお名前を魅力的な登壇者の軽妙なトークで楽しく伝えられ大満足。（文珠）

● 企画担当者

熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター）/薦直宏（日本生活協同組合連合会）

/文珠正也（日本協同組合連携機構）/鹿住貴之（JUON（樹恩）NETWORK）/元持幸子（長野県社会福祉協議会）

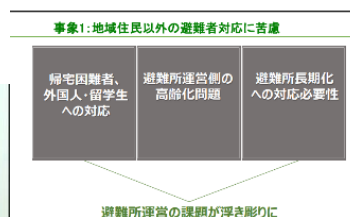
A3

「多文化共生×地域～地縁組織での取組から～」

外国人住民とつながり「ともに暮らす」ためのコーディネーション

多くの外国人が、ご近所さんとして暮らすようになりました。日本人・外国人の枠を超え地域でともに暮らすには、ことばや文化、生活習慣の違いによる障壁を取り除き、顔の見える関係をつくることが大事と言われます。そのためにできる取組は何でしょうか？そもそも「ともに暮らす」とは？

団地や町内会などの地縁組織で、外国人を含めた住民同士の相互理解・コミュニケーションの促進、防災などに取り組む事例を元に、市民の参加と協働を促し、ともに暮らすための身近な関わりを生み出すコーディネーションについて考えました。



● 登壇者

事例発表者 岡崎 広樹 さん（芝園団地自治会事務局長） *写真左

今野 均 さん（仙台市片平地区まちづくり会会長） *写真右

コメンテーター 西川 正 さん（NPO 法人ハンズオン！埼玉常務理事）

進行 藤井 美香 さん（公益財団法人横浜市国際交流協会）

進行 菊池 哲佳 さん（一般社団法人多文化社会専門職機構）

● タイムスケジュール

10:00 開会・事務連絡（オリエンテーション）

10:05 ご挨拶・趣旨説明

10:15 事例紹介 1 岡崎広樹さん

事例紹介 2 今野 均さん

10:55 事例を聴いて（コメンテーターコメント） 西川 正さん

11:05 グループディスカッション（4人での感想共有・情報提供等）

11:20 全体ディスカッション

12:00 まとめ、事例発表者・コメンテーターひとこと

● 参加者数

34名

● 分科会の内容

1 趣旨説明（本分科会の趣旨と進行内容）

2 事例紹介 1 岡崎さん「10年後の地域の姿～『共存』か『共生』か」

外国人住民が過半数となった団地における、「共存」（お互いに静かに暮せる関係）のため、そこから進めた「共生」（お互いに協力する関係）のため、とそれぞれの取り組みを紹介いただいた。住民同士のかけはしになる第三者の関わりを得たりしながら、見知らぬ隣人になりやすい外国人と日本人との「隣近所の多文化共生」の場

作りを行っている。「ゆるやかな共生」のための、隣近所の「場づくり」が必要との話だった。

3 事例紹介2 今野さん「3.11を語り継ぐ～震災当時の対応並びにその後の活動～」

自治会のまちづくり活動を進めていたところ、発生した東日本大震災。設置した避難所には、外国人・留学生も含む避難者があふれるなどし、運営者として外国人の受入れを通じた課題があったことを説明いただいた。また、震災後、災害に強いまちづくりにむけ、災害に強いまちづくり委員会設置などを行っていること、子育て世代、高齢者、学生、外国人など多様な住民が暮らす地域づくりに取り組んでいることをお話いただいた。

4 コメント 西川さん

両事例紹介を受けたコメントでは、研究集会オープニングセッションのキーワードなどとも絡めながら、本分科会テーマへの理解を深めた。人との関わりを遠ざけてきた私たちの社会だが、独力で問題解決ができない緊急時には、普段の「ともに暮らす」がないと助け合えない。そのときに、相手と直接ふれあうことによって解決する＝「よい、もめかた」＝「対話」が大事になり、そこに第三者の介在する意味、ファシリテーション／コーディネーションの必要性が生まれるのではないかとテーマにつながっていった。

5 参加者ディスカッション（4人グループでの、感想や聞きたいことの共有・情報提供）

6 全体共有

5の内容共有や新たな質問をもとに、次のような話題が共有された。

つながりや参加・交流のきっかけづくりは、特に「食」がよいのでは／顔見知りになるにあたり第三者が入ることが大切／関係が出来ていないともめるのは難しく、もめなれていることが大事／祭りをやっても、交流が促進されるのはテントの中だけ？など。また、外国につながる参加者からは「（イベントでは、国紹介ばかり期待されるなど）隣人としてではなく、「外国人」としての付き合いを求める日本人が多く、残念」という声もあった。

7 まとめ・ひとこと（事例発表者・コメンテーターから）

● 参加者の声

- ・外国の方と地域で生活すること、また、災害時の外国の方が避難所で生活することがどのようなものなのか、事例を聞かせていただき、とても勉強になりました。
- ・日本人と外国人の問題だけではなく、自分たちの暮らしの中で起きているコミュニケーション機会の不足から起こっている地域の問題にも当てはまるなあと感じました。（略）少し視点をずらすことで、なんだかワクワクするようなヒントをたくさんもらえました。
- ・とてもいい時間でした。共通点を作り出す。対話の場づくり。違うものの価値をつなげて面白くしていくコーディネーターになりたいと思いました。

● 企画担当者のコメント

岡崎さんと今野さんの実践事例紹介は、お二人が「日本人と外国人の共生」という課題に対して本気で取り組んでおられるからこそその示唆に富んだ内容でした。さらに西川さんのコメントを通じて参加者同士の対話が深まり、外国人と日本人という枠を超えて、今後の地域社会のありようを考える上でのヒントを頂きました。

● 企画担当者

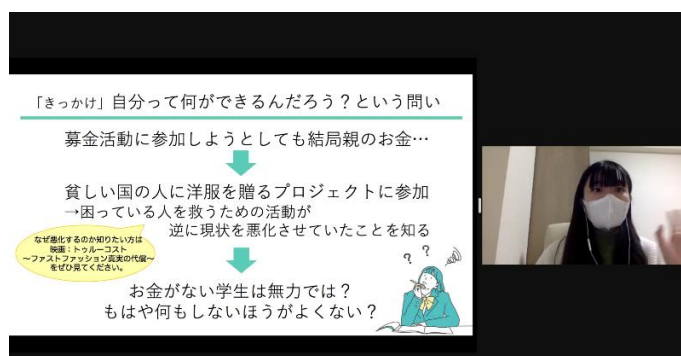
藤井美香（横浜市国際交流協会）/菊池哲佳（多文化社会専門職機構）/西川正（ハンズオン！埼玉）

A4

若者×社会変革 Z世代のリーダー達に学ぶ

～イマドキのコーディネーションとは？

「自分の気づき」をもとに、「自分発」で行動し始めた若者達に、大人世代はどんな応援ができるのか？自発的に活動を起こしたZ世代（1990年代後半から2000年代までに生まれた世代）といわれる若者達の話の聴きながら、その事例を通して、「若者が動き出す原動力となるものは何か？」「若者達の間で行われるコーディネーションはどのようなものか？」「動き出そうとする若者達の壁になる大人、応援になる大人」などについて、皆さんとともに考え、今後のコーディネーションについて考える機会にする。



● 登壇者

事例発表者 谷口 歩実 さん（#みんなの生理 共同代表）

事例発表者 須藤 あまね さん（環境パートナーシップオフィス等運営委員

／地方創生 SDGs ユースアンバサダー）

進行 竹田 純子 さん（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター／コーディネーター）

● タイムスケジュール

● 参加者数

10:00 オリエンテーション・趣旨説明

10:10 事例発表 谷口 歩実 氏

10:30 事例発表 須藤 あまね 氏

10:50 企画メンバーから事例発表者への質疑応答

11:05 ブレイクアウトでグループワーク（グループ内で気づきや
質問を共有し、スプレッドシートに記入）

11:30 グループワークの話題の共有し、質疑応答

11:55 事例発表者から一言

12:00 進行からのまとめ

12:10 放課後タイム

12:30 終了

45名

● 分科会の内容

オープニングで、この分科会を企画した意図・問題意識を説明した後、事例発表者から「自己紹介」「自身の活動の紹介」「活動を始めたきっかけ」等について事例を発表してもらった。その発表を受けて、分科会企画者と発表者の質疑応答を行った後、グループワークを行い、各グループで出た意見をスプレッドシートに記入しながら共有した。その中からいくつかを事例発表者に答えてもらい、最後にまとめを行った。

1. 事例発表① 谷口 歩実 氏

#みんなの生理は、アドボカシー活動、生理について話す場の創出、調査・発信、生理用品の設置・送付を行

っている。2019年に軽減税率が導入される際に「生理用品を軽減税率対象に！」という署名キャンペーンを行ったことをきっかけに活動を開始した。活動の開始時期がコロナ禍と重なったこともあり、設立当初からほぼオンラインで活動中。

2. 事例発表② 須藤 あまね 氏

現役大学生。「答えのない問いを考える人」と自己紹介。SDGsをコミュニケーションツールとして多様な活動を展開。高校生の時に「自分って何が出来るのだろう」と試行錯誤を始め、発見した課題についてデータを集め、地元と国の潮流を調べ、解決のために協力してくれる人を探してアクションを起こしてきたことを紹介。年代を問わず、協働するポイントは「やって」ではなく、「一緒に取り組む」姿勢。

3. 企画者との質疑応答

ボランティアコーディネーターの8つの役割に照らし合わせると、自分はどのような役割を大切に活動を行ってきたのか？

⇒何のために何を大切に活動するのか、自分達の活動のコアにあるものを明確化した。

⇒どうしてこの活動に興味を持ったのか、趣味などをじっくりと聴いて、その人に合った活動とつなぐようにしてきた。等

4. グループワーク

2の事例を聴いての気づきや感想、質問をグループで話し合い、スプレッドシートに記入。その中からいくつかをピックアップして質疑応答。「こんなに行動的になれる源は何か？」「若者を巻き込むのに必要なことは？」「意識高い系といわれないか？」など、様々な意見が出た。

5. まとめ

コミュニケーションツールが世代によって違うところなどはあるが、世代によって「〇〇だから」とカテゴリーに分けたり、決めつけたりはしないでほしい。世代を越えて「楽しみながら一緒に活動」という視点があると協働しやすい。また、答えを教えるのではなく、考えるヒントや情報を渡すことの出来る大人だと、若者達の活動の壁にはならず、応援することが出来る。また、いろいろな出会いを通じて若者の社会課題に関する興味関心が移り変わっていくことを遮るのではなく、送り出す姿勢も必要なのだろう。

● 参加者の声

- ・一緒に課題解決していこうと言ってもらえたことが嬉しいです。お二人の発想、企画力、行動力、巻き込む力、素晴らしいです。コーディネーターとして学んでいきたい点が沢山ありました。
- ・実際に活動されているお二人のお話が聞けて、いろんな意味でエンパワメントされました。自分が興味を持ったことに実際に行動を起こして活動されていることが一番印象的で、こういう方達がたくさん出てくると、様々な分野で様々な活動が展開され、よりよい社会につながっていくのだなと実感しました。

● 企画担当者のコメント

「若者はこうだろう」などと決めつけずに、相手の話をまずはしっかりと受け止め、「一緒に考えてみる」「楽しんでみる」という姿勢が、世代を越えた協働につながるのだと改めて認識した。また、若者に限ったことではないが、バーンアウトせずに活動を続けることが出来るように、活動を一人で背負わせ過ぎないサポートと、興味の範囲が広がり、次の活動に移り変わっていく時の応援の姿勢が大事だと痛感した。

● 企画担当者

開澤裕美（中央大学ボランティアセンター）/鹿住貴之（JUON（樹恩）NETWORK）

/竹田純子（龍谷大学ボランティア・NPO活動センター）

大規模イベントでのボランティアコーディネーション

市民の創意を生かし、地域にレガシーを残すカギは何か

近年、ラグビーワールドカップや東京オリンピック・パラリンピックなどのスポーツイベント、博覧会などの大型イベントでボランティア参加が広がっている。単なるマンパワーという面を越え、ボランティアが創造的にイベントを演出する重要なスタッフとなり、一度限りのイベントながら終了後にはその地域の活性化を進める主体になるために何が必要か。実際にボランティアコーディネーションにあたったお二人から実践事例に基づく解説をいただき、ワークショップを通して理解を深めた。

	A	B	C	D	E	平田コメント用
1 目的	ポジティブな気しか！ まちの良さを知ってもらおう	地域を盛り上げた。参加選手を育てる、応援する。	まちの活性化、スポーツ文化	地域の魅力を世界に。多様な参加、バリアフリー、国際交流	大きい視点→地域の活性化、魅力。多文化理解、国際交流。子ども教育、成長の場。	目的の共有 お金に換えられない報酬→主体性
2 採用	個人にピンポイントで届くには？メール案内（リビート）役割、時間など明確に、名前の付け方	手段：広報ツール相手：企業ボラ、中高スポーツ、レク団体、商工会議所で人を確保する。具体的人数。	地元民の意思	得意なこと、苦手なこと 主催者側の思いを伝えておく キャンセル対応 研修しつかり 友達同士で活動したい人、どうする	公算他、直接依頼も。メニュー提示＋一緒に作るう、創意工夫の余地。広報媒体、世代に応じて。研修で思いを大切に。配置は選べるように。	人数設定の裏話
3 活動中	チーム名で一体感。世代間交流の工夫。自分でニックネームをつける。	ありがたうと言ってくれる。ボラ同士がおしゃべり、クーポン券、グッズ	コスプレ、着ぐるみ、交流会	SNSで発信できる仕組み。お客様と交流できる機会（ハイタッチ）	一体感が生まれる工夫。休憩を交流のきっかけに。	マンパワーとしての程度、頼りにするの？ みんなの意見、気持ちを受け取ったよ、が大事
4 リスク	先輩に聞く。ランナーの近くにいるボラが一番よく	自然：天候、コロナ 人的：テロ、手荷物、子どもが出てしまった 想定マニュアル	天候、外国の方、緊急搬送、車いす	悪天候、停電、災害。事前に。	天気。判断。	ストップする勇氣
5 フォローアップ	またやりたい、誰か誘いたい、受け入れ側の姿勢も大事。この人たちと過ごしたいという。	アンケート、記念品。帽子交換。ありがたうで終わる。終了後の交流、次への継承。	振り返り、交流会、次回もやりたい、市民ランナーが走りやすい環境づくり	またやりたい、大事な人を誘いたい、仲間になって活動したい、誘い合う、つながり、自信がつく、話そう、聞えろという変化。	次の目標、希望、動画で感動をつくる。	いつ芽が出るかわからない

● 登壇者

事例発表者 神野 幹也 さん（東京 2020 大会組織委イベントサービスマネージャー／ラグビーW 杯 2019 組織委ボランティアマネージャー兼観客サービスマネージャー）

平田 隆之 さん（東京 2020 みんなの都市ボラ大学アドバイザー／山口ゆめ花博 2018 県民参加支援ディレクター／特活法人 市民プロデュース理事長）

ミニ講義 早瀬 昇 さん（社会福祉法人 大阪ボランティア協会 理事長／J V C A 運営委員）

● タイムスケジュール

● 参加者数

13:30 開会・オリエンテーション・講師紹介（足立陽子さん）

13:35 講義（早瀬さん）『大規模イベント時のボランティアコーディネーションの特徴』

13:45 実践報告 1（神野さん）『メガイベントにおけるボランティアについて』

14:05 実践報告 2（平田さん）『大規模イベントでのボランティアコーディネーション』

市民の創意を生かして地域にレガシーを残すカギについて』

14:25 休憩

14:30 「ボランティアマネジメントの流れとグループワークの進め方」の説明（早瀬さん）

14:40 グループワーク 『架空の大規模イベントに基づくワークショップ』（Jamboard を使用）

15:25 グループ発表

15:50 登壇者による各グループ発表に対するコメント（神野さん、平田さん）

16:05 事前質問への回答とまとめ（神野さん）

16:20 実践事例に基づくレガシーの作り方の解説（平田さん）

16:25 閉会のあいさつ（文珠正也さん）

16:30 放課後交流会

17:00 終了

20 名

● 分科会の内容

早瀬さんから「大規模イベントでのボランティアコーディネーションの特徴」としてを解説。自発的に参加するボランティアはイベントで起こりがちなアクシデントに逃げずに対応。創意工夫で楽しい雰囲気を作りだす。

【神野さん実践報告】

<メガイベントでのボランティアの役割> 会場の“祝祭感”を醸成し非日常空間に変えるのが「イベントの顔」であるボランティア。従来は組織動員前提の無償奉仕だったが、今は個人の意思で参加し、運営の一員としてイベントを楽しむ、という海外流の考えが広がってきた。金銭に代わる対価として「普段できない体験、出会い」を得て、新たなコミュニティ＝サードプレイスの形成にもつながる“コト消費の象徴”ともいえる。

<長期伴走プロジェクトで、「創意工夫の力」を引き出すコーディネート> メガイベントは、ボランティアを伴走しながら準備（募集→採用→決起イベント→研修→本番→感謝イベント）に長い時間をかける「ボランティアジャーニー」で、単発イベントを運営するのが特徴。イベントと一緒に創る“担い手”＝ボランティアの想い、創意工夫の力を引き出すことがコーディネート側に求められる。そこで、「良いイベントとは？」「成功とは？」などのゴールを共有しつつ、その実現方法としてアプローチの多様性を尊重することが鍵。

<開催レガシーを日常に継続させていくために> 参加への心理的ハードルが低いスポーツボランティアは、地域課題への目覚めや地域コミュニティへの参画のフックになりやすい。主催者はその可能性を理解する必要がある。

【平田さん実践報告】

人口減少が進む中、大型イベントは、行政任せの社会から市民が自主的・主体的に地域・公共に関わること＋多様な主体による協働の実験場として展開されて久しい。大規模イベントは単発に見えるが、毎年、どこかで開かれ、脈々と歴史がつながっている。国体や博覧会は準備期間が数年と長く、先催県・後催県などでノウハウや課題の共有もある。イソップ寓話の「3人のレンガ職人」のようにビジョン・大義の提示と共有が大切。山口ゆめ花博では「新しい公園のあり方を作る」という理念が共有され、公園を活かす多彩なコンテンツが持ち込まれた。

【ブレイクアウトセッション。Jamboardを使い仮想イベントでの留意点を出し合う】★前ページの写真

【発表結果へのコメント】

（神野さん）動機付けには、①「一緒に作りましょう」と自分事化する、②着ぐるみやアスリートとの交流など参加によるプレミアムな体験ができる、③一つのイベントと一緒に創っていった「チーム感」の創出が大切。

（平田さん）このイベントの大きな目的・意義は何かを魅力的なメッセージとして発信し、それをボランティアそれぞれが自分事として納得し、役割を意識して活動できることも大切。

【事前質問への神野さんのコメント】

ボランティアに、お金で換えられないより価値の高い体験を返すことで「やりがい搾取」とならない。コミュニケーションを途切れさせないことはリスクマネジメントの核。ボランティアは、最もレガシーとして注目されやすい。終了後もコミュニケーションを絶やさず、次の活動の受け皿を示す必要だ。

【レガシーづくりについての平田さんの解説】

東京オリンピックが1年延期になった際、ボランティア同士がオンラインで学びあう「みんなの都市ボラ大学」を開設。大会開催前にすでにひとつのレガシーを作ることができた。イベントでは、ポジティブ、無形、偶発的な形でレガシーが生まれる。コーディネーターは、そのプロセスを設計することも大切な役割だ。

● 参加者の声

- ・最初に体系的なレクチャーがあり、ブレイクアウトで実践的な交流や意見交換ができ、バランスが良かった。
- ・大規模ボランティアをきっかけに社会を変えて行くという話を聞き、確かにできるかもと感じた。
- ・大規模イベントに限らず「ボランティアとは何か？」を見直す貴重な時間となった。

● 企画担当者のコメント

- ・期間限定で多くのボランティアが関わる大型イベントでこそ、コーディネーションの質が問われる！（早瀬）
- ・ボランティアへの働きかけだけでなく、主催者への働きかけや哲学の共有が成功への鍵だと学んだ。（足立）
- ・イベントに限らないボランティアコーディネーションの神髄を教えていただけた「神回」だった。（文珠）

● 企画担当者

早瀬昇（大阪ボランティア協会）/足立陽子（東京都人権啓発センター）/文珠正也（日本協同組合連携機構）

B2

「難民」と支え合い、学び合う

～固定的な関係性をずらすコーディネーション～

日本在住のミャンマー出身者のなかには、難民的背景のある人、帰ることのできる国をもたない人々もいる。この人たちを主な対象に日本語学習支援や生活サポートを行う、Villa Education Center (VEC) という市民団体は、学生や社会人等様々な人の参画を得て、難民当事者とともに運営を行っている。ここでは、集う人すべてで対等な関係を築けるよう、「支援する」「支援される」という固定的な関係性をずらすコーディネーションが意識されている。

分科会では難民当事者や話題提供者等の対話をもとに、「ずらし」のコーディネーションについて参加者全員で考えた。



● 登壇者

講演者 チョウチョウソー さん (VEC 副代表理事 ミャンマー出身・難民認定者

NHK 国際放送アナウンサー) *中央

話題提供者 五嶋 友香さん・澁谷 こはるさん・東樹 美和さん・西村 愛さん (東京女子大学) *左

(VEC 日本語活動ファシリテーター、オンライン教科学習支援活動リーダー)

話題提供者 吉村 洋子 さん (VEC 事務局長・日本語教室教師)

コメンテーター 青柳 りつ子さん (アオヤギ行政書士事務所 行政書士、社会福祉士) *右上

コメンテーター 遠山 昌子 さん (生き方のデザイン研究所代表理事・コーディネーター) *右下

ファシリテーター 松尾 慎 さん (VEC 代表理事、東京女子大学)

● タイムスケジュール

13:35 開会・分科会趣旨説明

13:40 講演：チョウチョウソーさん

13:55 話題提供1：東京女子大学 学生の皆さん

14:15 話題提供2：吉村洋子さん

14:35 講演者コメント

14:45 グループディスカッション1 (自己紹介・感想共有)

15:00 休憩・質疑応答

15:20 コメンテーターのコメントと対話 (青柳さん・遠山さん)

15:50 グループディスカッション2 (感想共有・質問内容共有)

15:55 質疑応答・登壇者、参加者の対話

16:20 登壇者のコメント・まとめ

16:30 終了

● 参加者数

13名

● 分科会の内容

ミャンマーの状況や日本における難民の認定等を解説する事前視聴用動画を参加者に案内し、共通の予備知識をもったうえで分科会に参加できるようにした。

1「難民を知る・活動への思い」チョウチョウソーさん

難民認定を受け、25年ぶりにミャンマーに帰国したときの印象に始まり、日本語を学ぶ活動を立ち上げた経緯、活動を続けていくうちに内容や活動範囲が広がっていくこと、言葉や文化の壁を越えて人とのやりとりがあることなどをうかがった。「自分のやりたいことができ、それが人のためになっていることが幸せ」と話していただいた。

2「学び合いの場 VEC 日本語活動」 学生のみなさん

VEC の日本語活動をファシリテートする学生4人による活動の紹介。やさしい日本語ニュースを題材に、ファシリテーターやミャンマー参加者等、全員が対等に学び合うという活動の具体的な内容や様子、また、お互いを知り歩み寄る関係性などを知ることができた。日本語力に関わらず、対話・自己表現を通して楽しく学ぶ様子が伝わってきた。

3「VEC 日本語教室 生活相談 – ずらせないこと・ずらすべきこと–」 吉村洋子さん

2の日本語活動と連動する日本語教室の紹介を中心に、VEC の活動全体を伝えていただいた。日本語教室では、日本語を教える人・学ぶ人という学習上の関係性は「ずらせないこと」だが、日本社会で抱える困難の解決の支援、生活相談の場として、日本語教室（教育）という範疇からは「ずらすべき」と考えているとのこと。安心できる場所・みまもりの場である。2、3を受けて、チョウチョウソーさんから対話のもつ力についてコメントがあった。

4 コメンテーターからのコメント 青柳りつ子さん・遠山昌子さん

コメンテーターには、外国人相談事業のコーディネーターを長く担ってきた青柳さんと、障害のある人となない人がともに参画する場作りをしながら、誰もが暮らしやすい社会を創り出すことを目指す遠山さんのお二人を迎えた。自己紹介に加え、それぞれの活動分野での経験をもとにコメントいただいた。特に、分野を超えた共通点として、世話をする・世話をされる、感謝する・感謝される役割を固定しないずらしについて、また、違う人と出会い、対話することにより多様な人や価値観にOKを出せることを目指すなど、印象的なコメントを共有することができた。

5 質疑応答・全体での対話（一部）

日本語学習活動・教室に来るみなさんの、モチベーションはなんですか？／〇〇コミュニティとしてではなく、個人として相手に関わるのが大事。／日本人・外国人ではなく「ともに日本に住んでいる人」としてつきあいたい。

● 参加者の声

- ・当事者を含む多様な参加者が集う「場」があり、そこでは対等に、役割などの枠で固定化しない関係を築くこと。これは、あらゆる市民活動に当てはまる根源的な定理だと思いました。
- ・私自身、難民の方に出会ったことがなく、現場についても無知でしたので大変勉強になりました。

● 企画担当者のコメント

「支援者」「要支援者」という関係を「ずらす」ことの重要性について、VEC の実践に加え、障害分野の話が加わることで、深めることができた。「外国人」「障害者」と一括りにするのではなく、一人の人間として、対話をするのが大切なのであろう。コーディネーターとしては、違うからこそ、知らないからこそ、おもしろいと思いたい。

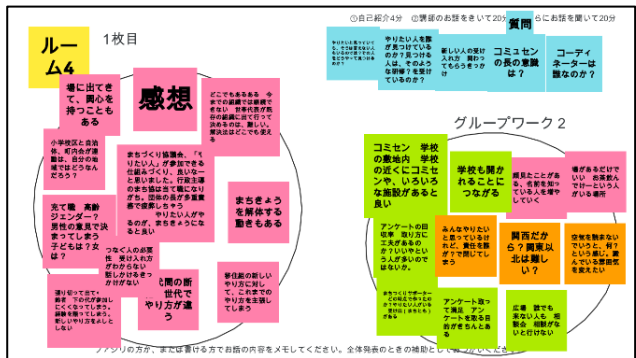
● 企画担当者

松尾慎（東京女子大学）/鹿住貴之（JUON（樹恩）NETWORK）/藤井美香（横浜市国際交流協会）
/遠山昌子（生き方のデザイン研究所）/疋田恵子（杉並区社会福祉協議会）

B3

もっと楽しくまちづくり、地域を元気にしたい人全員集合！！ ボランティアコーディネーション力を「地域運営組織」の運営に活かすには 市民一人ひとりの“出番”を作り主体的にかかわるまちづくり

地域の課題を地域で発見し、地域で解決していく仕組みをつくるためには、市民一人ひとりの“出番”を作り主体的にかかわっていくまちづくりを進めるとい、まさに“ボランティアコーディネーション”の手法が必要とされています。市民が自分たちの地域で起こることを「自分ごと」と捉え、市民自身で地域課題を解決していけるように「地域運営組織」を支援する明石コミュニティ創造協会の活動。「自分でつくるってたのしい！」というきっかけの場をつくり続ける実践事例をもとに、新たな視点での「地域運営組織」の運営について学びます。



● 登壇者

講師 柏木 登起 さん（一般財団法人明石コミュニティ創造協会 常務理事兼事務局長／
NP0 法人シミズシーズ 代表理事／コミュニティ・プランナー）

● タイムスケジュール

- 13:30 開会、チェックイン、趣旨説明
- 13:45 話題提供①
- 14:15 グループワーク①（Jamboard 使用）
- 14:45 全体共有
- 15:05 話題提供②
- 15:35 グループワーク②（Jamboard 使用）
- 16:05 全体共有
- 16:25 チェックアウト
- 16:30 閉会～放課後タイム
- 17:00 終了

● 参加者数

31 名

● 分科会の内容

■ 趣旨説明

人口減少・超高齢化という課題に直面する日本社会において、地域での経済的・社会的な共同生活を維持していくためには、多様なセクターや組織・人々がつながり、アイデアを出しあっていくことが求められています。町内会や自治会などの運営が限界を迎えつつある状況の中で、その活動を支え、さらに地域を巻き込んでまちづくりを推進していくためには、より広い視野で活動を展開する「地域運営組織」の存在が重要となります。市民一人ひとりの“出番”を作り主体的に関わっていくまちづくりを進めるとい、まさに“ボランティアコーディネーション”の手法が必要とされているのではないのでしょうか。

■事前アンケートより

高齢化・世代交代が進まない・団体を維持するだけが目的・担い手の固定化・担い手不足・地域への帰属意識が薄い・つながりをどう広げるか・参加者が楽しく主体的に活動に参加してもらえるには

■チェックイン（アイスブレイク）ブレイクアウトルーム（1 グループ 4 人）に分かれて自己紹介。

■話題提供① 明石市における地域自組織支援の取り組みについて

明石市がつくった外郭の中間支援組織「明石コミュニティ創造協会」で市民が主体的に活動する環境をつくり市民協働まちづくりを広げることをミッションに活動。地域自治組織を支援。これからの地域づくりは「守り」と「攻め」が必要。この指とまれ方式など担い手不足にも有効。明石の場合は、多様な人が地域づくりの運営に関わる仕組みを作っている。これからのまちづくり協議会は関心層の方達がいろんな形で自分のやりたいこと、関わりたいことを中心に関わっていく仕組みが必要。

まちづくり協議会の事務局は事務職や事務処理をする人ではなく、いろいろな方々を巻き込むコーディネーターであり、コミュニティセンターはやりたい人がフラッと来られる居場所であったり、交流できる拠点であることが大事。

■グループワーク①「話題提供①を聞いて感想、質問など」

■話題提供② ボランティアコーディネーションの視点について

地域にはやりたいと思っている人がいる。その人たちが参加できる仕組みをつくる必要がある。朝霧校区のまちづくりサポーターは個人が参加する環境。まちづくり協議会をあて職でない形にステップアップするために、まちづくり計画書をつくるプロセスを通じて組織をパワーアップさせ、多様な人たちを巻き込んでいった。アンケートは巻きこみたい、やりたい人を見つける手段であり、まちづくり協議会を知ってもらう広報にもなる。関心のある人でつくるプロジェクト制では公募や関心のある方を 1 本釣りすることができ、個人が参加できる口実を作ることができる。やりたい気持ちが出てくるような会議の場づくり、意見を言いやすい雰囲気をつくることも大切。

これからの地域づくりは、地域の中でなんでも発言できる雰囲気、風土を作ることが重要。やりたい人のつづやきを拾える場、みんながワイワイ言える場が必要。事務局はコーディネーター役でありコーディネーションの視点を持って、やりたい人のつづやきを拾ってつなぐことが重要。

■グループワーク②「話題提供②を聞いて感想、質問など」

● 参加者の声

- ・内容もそうですが、柏木さんの熱量をひしひしと感じられたのが一番の収穫です。
- ・アンケートや公募の内容は自分の地域でも真似をさせていただきます。
- ・地域住民のやる気を引き出す伴走のさじ加減を学んだ。これからの活動の道筋となった。
- ・介入しすぎないことを念頭に、少しずつでも地域の皆さんの主体性をはぐくんでいけたらと思います。
- ・自分のやろうとしていたことの、背中を押してもらえた 3 時間でした。
- ・ジャムボードも役立ちました。事務局の皆さんもありがとうございました！

● 企画担当者のコメント

- ・世帯から個人へ、動員から有志へ、だからコーディネーションが必須とみんなで確認できて あなうれし（西川）
- ・お申込み下さった皆さんのニーズに沿った企画になっていたでしょうか？そうであったら嬉しいです！（藤掛）
- ・柏木さんのお話は地域に希望と可能性を感じるお話でした。ぜひ実践につなげていきたいですね。（佐藤）
- ・丁度いいさじ加減のボランティアコーディネーションで、まちづくりはもっと楽しく！地域が元気になるんですね。（橋詰）
- ・地域の中でやりたい人を巻き込む仕組みが、地域の風土や文化になる。そうですね。（栗原）

● 企画担当者

栗原穂子・佐藤美恵（ぼらんたす）/西川正（ハンズオン！埼玉）/橋詰勝代（高島市社会福祉協議会）
/藤掛素子（明治大学ボランティアセンター）

B4

地域包括ケア、地域共生社会における市民と専門職との協働

個を支えるチームとして成熟していくために

地域包括ケア、地域共生社会は専門職のみで実現できるものではなく、地域に住む市民との協働が欠かせないものといわれています。平成 18 年地域包括支援センターの創設とともに、地域包括ケアの実践が各地で進められ、ひとりの人の地域生活を市民と専門職がチームで支える実践も展開されていますが、その実情は様々です。

この分科会では、個を支えるチームとして市民と専門職との協働がどのように機能し合うとよいのか、実践報告をもとに見つめ、よりよい協働の在り方についてともに考える場を創ります。



● 登壇者

実践報告者 1 長田 美智留 さん（魚沼市教育委員会、弥彦村教育委員会所属スクールソーシャルワーカー）

実践報告者 2 佐藤 正枝 さん（公益社団法人日本社会福祉士会 地域包括ケア推進委員会 認定社会福祉士）

コーディネーター 山本 繁樹 さん（社会福祉法人立川市社会福祉協議会 地域活動推進課長）

コメンテーター 疋田 恵子 さん（社会福祉法人杉並区社会福祉協議会）

● タイムスケジュール

● 参加者数

13:30 オリエンテーション

13:35 分科会の趣旨説明

13:45 実践報告 1 小学生の支援での協働

14:10 実践報告 2 認知症一人暮らしの方の支援での協働

14:35 質疑応答 （10 分間休憩）

15:15 ブレイクアウトセッション 1 自分の課題（意見交換）

15:35 全体共有

15:50 ブレイクアウトセッション 2 課題へのアイデア

15:10 全体共有からまとめへ

15:35 放課後タイムへ

34名

● 分科会の内容

最初に、ファシリテーター山本繁樹さんより、厚生労働省の資料も織り交ぜながら本分科会の趣旨説明があった。理念でもあり施策でもある地域包括ケアや地域共生社会の実現を目指す中で、地域の自主性や主体性に基づき地域特性に応じて作り上げる地域包括ケアのネットワーク、また誰もが役割を持ち、支え支えられる関係を循環させる包摂的な地域共生社会を、市民と専門職の協働でどうつくりあげていくのか。児童分野と高齢分野の二つの実践事例を聴き、参加者が自らの課題と向き合い、考える場としていきたいとの説明があった。

（1）実践報告 1

スクールソーシャルワーカーの立場から、小学生の支援における市民との協働について語った。人口 35,000 人

程度の山あり町あり田んぼありの中規模な市の中心部にある大きな小学校の特別支援学級在籍の児童の特性をめぐって、母親が地域の目を気にして孤立気味になり、児童をできるだけ外に出さないようになってしまった事例について、学校からの要請で関わった。地域の協力者を増やし、閉じかけた家庭が地域とつながる過程を報告した。

(2) 実践報告2

委託型地域包括支援センター管理者・主任介護支援専門員の現職の立場から、地域ケア個別会議を通して、ご近所の方に対する被害妄想のある認知症一人暮らし高齢者をご近所の支援者（市民）と親族、専門職がつながり、チームとしての支援が円滑に進むことを目指し、生活の様子を互いの目を通してチームとしてアセスメント、役割分担をしていった。その過程でバイステックの7原則を自分の言葉で意識して市民と専門職の共通言語にしていく試みについても話された。

(3) 質疑応答および2回にわたるブレイクアウトルームを経て

参加者の皆さん、ファシリテーター、コメンテーターより、二人の実践報告者から引き出されたことは、スクールソーシャルワーカーが地域の中の母親の孤立の背景にあるものを見極めながら、子どもと母親が育つ地域の中に味方をつくる必要があるというニーズに気づき、地域の協力者、社会資源を引き寄せ、地域に委ねていくプロセス。目指すところは、SOSを出せる地域を創ることであることにも話が及び、それは地域共生社会の実現にも通底するものであること。そのプロセスにも通じるものとして、①あなたの抱えていることはあなた一人で担うものではないことをまず当事者が認識すること ②面談を重ねてふさわしい社会資源との出会いを求めること ③子どものために母親自分が外へと手を伸ばそう、とスモールステップを踏んでいくこと が確認された。

地域ケア個別会議の実践からは、市民の輪の中に専門職が入れてもらうスタンスや、市民と専門職の共通言語を築くことの大切さ。地域は支えてくれる側面もあるが不安から排除する側面もあるという二つの側面に触れた。市民側の不安を払拭するために、事実をもとに問題点のみならず強みを洗い出し、安心してもらう場面も会議の展開過程で設けていることを確認した。また、市民側にある「都合の良いときだけ活用され必要なことは何も教えてくれない」と全部を知りたいという感情に対し、専門職側の良識「過不足ない情報収集、情報提供」の必要性を理解いただくために、バイステックの7原則の意識の一つ「あなたが他人に言ってもらいたくない秘密は守ります」を伝えている、とその活用法についても触れられた。

両者の共通点として確認できたことは、専門職の支援を必要としている人は地域で生きていて専門職の支援だけでは、その生活は支えられないということ。支援のニーズを抱えていても地域に開かれておらず、またそのニーズに自ら気づいていない、例えばヤングケアラーの存在など「いつでも窓口は開けているよ」と工夫をしながら発信していくこと。地域には必ず協力してくれる人がいる。地域を信頼し適切な自己開示をしていくことなどが確認された。

● 参加者の声

全国の参加者、そして様々な立場で実践されている方のお話を聴けて良かった。専門家だけで解決できない問題も地域の力で解決できること。それぞれが「強みをアピール」してお役に立ちあえる関係ができたらいいな、と思いました。チームの作り方、共通認識、細かい連絡による顔つなぎなど、できることから自分もやってみようと思いました。

● 企画担当者のコメント

- ・皆様のおかげでこれからも大事にしていくことがたくさん抽出できました。ありがとうございました。（佐藤）
- ・「市民と専門職がお互いの持ち味を理解し合い、対等な関係で取り組むチーム」づくりに必要な専門職の市民と向き合う姿勢・コーディネーションプロセスなどを深めることができた。関わった皆様に感謝です。（疋田）

● 企画担当者

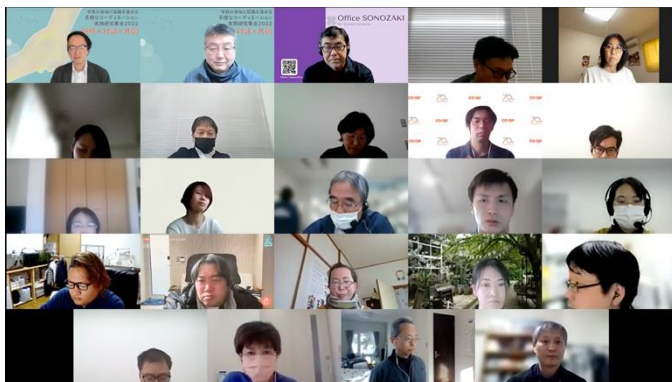
佐藤正枝（日本社会福祉士会）/疋田恵子（杉並区社会福祉協議会）

B5

わがごとの災害

いつ被災者になるか分からない時代の「災害支援コーディネーター」

毎年のように各地で災害が発生し、いよいよ被災は他人ごとでは済まされなくなってきました。避難所運営や外部ボランティア受け入れなど、被災した地域の住民が災害にどのように向き合えるかが今後の被災地における災害支援活動の鍵となってきます。いつ被災者になるか分からない時代、私たちは一層被災者の目線に立ち、そこで起こるさまざまな課題の解決を進めなければなりません。当日は災害被災地に寄り添うコーディネーションのあり方を考え、そしてそこから見えてくる自助・共助・公助のあり方を学び、共有しました。



● 登壇者

事例報告者 原 盛輝 さん（熱海市社会福祉協議会）

事例報告者 明城 徹也 さん（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOD）理事）

事例報告者 園崎 秀治 さん（オフィス園崎 代表）

ファシリテーター 杉浦 健 さん（共働プラットホーム）

● タイムスケジュール

● 参加者数

- 13:40 趣旨説明
- 13:45 報告①「令和 3 年 7 月土石流災害における熱海市災害ボランティアセンターの運営」…原 盛輝さん
- 14:00 報告②「NPO 等による支援活動の事例と『災害中間支援組織』となるネットワークの構築」…明城 徹也さん
- 14:15 報告③「コロナ禍における災害ボランティアによる支援の大きな転換点」…園崎 秀治さん
- 14:30 ワーク①「自身の体験から起こるかも知れない災害への備えを考える」
- 14:55 質疑応答タイム
- 15:20 ワーク②「『わがごとの災害』に対する私たちの備え」
- 16:00 質疑応答タイム
- 16:25 まとめ

32 名

● 分科会の内容

「毎年のように各地で災害が発生し、いよいよ被災は他人ごとでは済まされなくなってきた」
研究集会では、毎年近々に発生した大災害の支援活動の現場から、その活動報告やそこに発生する問題の提議

を行ってきた。しかし、この数年、まさに毎年のように災害が起こる。それも甚大な被害をもたらす。

今私たちに求められることは、外部へ支援に赴く側の視点だけではなく、被災者となった場合の内部に対する支援を受け持つ視点であるという観点から、2021年7月に甚大な被害をもたらした「令和3（2021）年熱海市伊豆山土石流災害」でのさまざまな活動報告を、実際に被災現場で災害ボランティアセンターの運営に尽力された熱海市社会福祉協議会の原さんから提供いただいた。私たちの視点が常に支援者ベースになっていたところを、「わがごとの災害」としてネジを締め直してもらった心境だ。被災者であると同時に支援者でもある。そうなった場合に何が求められるのかを確認した。

続いて JVOAD の明城さんからは、外部支援者の目線で NP0 等への活動支援と活動調整や情報共有会議の重要性、そのために必要な「災害中間支援組織」＝ネットワークについて提供いただいた。特に災害支援コーディネーションや災害中間支援団体の定義、そしてコーディネーションのガイドラインに対する取り組みも学んだ。

最後の報告はオフィス園崎の園崎さんから。「アフターコロナの被災地支援」を主軸に、これまでのやり方では通用しなくなったあたらしい支援体制のかたちについて提供いただいた。阪神・淡路大震災（1995）、新潟県中越地震（2004）、東日本大震災（2011）、そしてアフターコロナ（現在）。それぞれのフェーズを俯瞰し、全国協働型・集約型の支援体制から地元協働型・分散型の支援体制へシフトする過程を学んだ。特にアフターコロナにおける災害ボランティアセンター運営の「三種の神器」として挙げられたフェイスブック、ズーム、キントーンといった ICT（情報通信技術）を駆使した「今流」の活動スタイルには驚かされた。

グループワークでは「自身の体験から起こるかも知れない災害への備えを考える」「『わがごとの災害』に対する私たちの備え」という二つのテーマでディスカッションをいただいた。経験あるなしにかかわらず、明日来るかも知れない災害に対する備えは大切だ。それは決して「他人ごと」ではない。外部団体とどうつながり、内部をどのようにまとめ、そして目からうろこの ICT ツールをどのように使いこなしていくのか？興味は尽きることがないが、それが興味にとどまらず、「わがごと」としてどう認識できるのか？最後はその問題提議で締めくくられた。結論は参加者の思いさまざま。多くの宿題を、それぞれのフィールドに持ち帰っていただいた。

● 参加者の声

- ・キントーンの仕組みが知らなくて勉強になった。
- ・どういう人がコーディネーターになるのか。その養成方法などが理解できた。
- ・県をまたぐ隣接市町村間の支援の仕組みを作っておくことが必要。
- ・社協が平時に大学ボラセンとつながっておく必要がある。
- ・情報共有会議を開催する。生協の場合は被災者情報、被災地情報に基づいて会員生協や日本生協連にも情報をつなぐ。
- ・復旧期だけでなく、今後は復興期の支援にも関わっていききたい。
- ・被災したからこそ、過去の経験にとらわれるのではなく、最新の事例や情報を取り入れなければならない。
- ・社協や生協含めて、日頃からの市民との接点が重要。平時の事業が災害時にも役立つ。

● 企画担当者のコメント

ICT とはおおよそ縁のないアナログな災害ボラセン運営を描いてきました。それがこの数年でこんなにも変化していたとは驚く以前に恥ずかしかった。「わがごとの災害」というテーマは、支援する側とされる側の境界をなくし、災害に対し、個々の立ち位置で「越境×対話×共創」という意味で生かされたのではないかと思います。災害に向き合う多くの皆さんに学びの場を提供できたのではないかと。ありがとうございました。（杉浦）

● 企画担当者

杉浦健（共働プラットフォーム）/園崎秀治（オフィス園崎）/明城徹也（JVOAD）

B6

団体の岐路に立ちあう中でのコーディネーターの関わりとは？

社会の変化や個々の事情によって、様々な場面で市民団体が岐路に立たされることは多々あります。特にコロナ禍の現在、市民団体の多くがその矢面にいる中、新たな形を変えて再出発したり、団体を閉じる決断もあり、次のステップに行くためには、様々な決断をする必要があります。そんな中、サポートする立場のコーディネーターは、どのような視点でかかわっていくべきでしょうか？

この分科会では、市民主体のボランタリーな団体の始めから終わりまでの形を改めて認識し、そこに介在しているコーディネーションの在り方に考えていきます。



相談者のお話	対 応	思っていたこと
⑧「複数のメンバーが退会していった」 「活動のために、辞めない方がいいんじゃないか」 (迷い、手放す恐怖)	→「揺れ」を一括に体感する →簡単ではないこのプロセスに、付き合う	・「手放す」のは案ではない ・行きつ戻りつも大事。急がない ・一緒に迷うなら一緒に迷いながら共に進む
★「辞める」決意の確認		
【辞めたあとのこと考え始める】		
⑨「会を辞めても、活動はしていきたい」 「新しい活動を立ち上げたい」 「名簿や活動の情報をこれからも使いたい」 「これまで自分たちがつくってきたものだから」	→新しい活動を相談の中心に据えていく移行期 →適切な運営ができるようにしていくサポート	※活動と個人が切り離されつつある ・多様な「岐路の先」を検討できるようになるフェーズがある（待つ） ・「活動したい」気持ち大事にしたい
⑩団体を退会。 2人で新たな団体を立ち上げる準備を始めた。 これまでと同じ活動だが、とても楽しそう。 元の団体は、活動を縮小しながら、継続している。	→いつでもなんでも話してください →困りごとがなくても、来てください	・組織づくりに経験がいかず ・残された団体とのつながりも保つ ・両者に「両者」とつながっていく センターだと知っておいてもらう
★お疲れさまでした & これからもよろしくお願いします		

● 登壇者

事例発表者 森 玲子 さん（東京ボランティア・市民活動センター 相談員）

事例発表者 開澤 裕美 さん（中央大学ボランティアセンター）

コメンテーター 小原 宗一 さん（北区社会福祉協議会）

コメンテーター 熊谷 紀良 さん（東京ボランティア・市民活動センター 統括主任）

● タイムスケジュール

- 13:30 開会、事務連絡、趣旨と登壇者紹介
- 13:40 参加者の紹介
- 13:50 団体のライフサイクルについて、問題提起
- 14:10 森さんの事例紹介
- 14:30 開澤さんの事例紹介
- 14:45 ポイント整理、ブレイクアウトの説明、休憩
- 15:05 ブレイクアウトその① 15分
- 15:25 ブレイクアウトその② 30分
- 15:55 全体共有（スプレッドシート使用）、まとめ

● 参加者数

34 名

● 分科会の内容

分科会の意図を確認した後、まずはチャットを利用して、参加者の紹介を行った。属性としては、社会福祉協議会の方、大学ボランティアセンターの方、NPOの所属の方で、この分科会に参加した理由を挙げてもらった。

1. 団体のライフサイクルについて

小原さんより、市民団体のライフサイクルについてのお話をしていただいた。団体が大きくなれば組織上の問題も大きくなっていくこと、効率のよいことを求められるわけではないこと、団体には立ち上げ期、発展期、衰退期などがあり、いま相談を受けている団体がどのような状況であるかを見極めながら対応すること等、これからの話の導入や問題提起をしていただいた。

2. 森さんの事例紹介

森さんの所属である、東京ボランティア・市民活動センターで受けている相談において、ひとつの事例を丁寧に紹介していただいた。団体の中で意見がまとまらなくなったり、気持ちにズレが生じてしまった事例について、森さんがどのように対応し、何を感じられたかを説明していただいた。また、団体の岐路でどのような事例があるのかなど、経験豊かな森さんならではの意見を話していただいた。

3. 開澤さんの事例紹介

大学ボランティアセンターという、社会福祉協議会とはまた違う内容の話を紹介した。大学生は4年間で卒業し、すぐに世代交代すること、また被災地支援団体の特徴などを話した後、2021年度末で団体を閉じる決断をした3つの学生団体の紹介を行った。どのように学生が決断し、そこでどうコーディネーターがかかわったか、その際のモヤモヤも話をしていった。

4. ブレークアウト

4人程度のグループで、2回行った。1回目は「自分のコーディネーターとしての悩み」を15分、2回目は「コーディネーターとしての関わり方」を30分話をした。各グループ、スプレッドシートを利用し、どのような話をしたかを議事録にとっていただいた。

5. 全体共有、まとめ

スプレッドシートをみながら、全体で共有していった。参加者それぞれが、団体の岐路に立ちあう中でどのような姿勢を心がけ、大切にしながら相談者と向き合うかを確認していった。

● 参加者の声

- ・この分科会のテーマ設定が画期的だと思います。答えがすぐに出るテーマではないですが、ぜひ今後もこのテーマで企画の設定をお願いします（放課後タイムのようなゆるい交流会でもいいかも）。
- ・全国各地で同じような課題を抱えており、迷いながら活動されていることが分かりました。こうした共有の場が大切であることをあらためて感じました。ゆっくりの進捗でポイントを整理して下さり、グループでもたくさん話ができてよかったです。企画運営をありがとうございました。
- ・日々、相談者に真摯に対応しておられるみなさんとお話することができ、自分の大切にしていることが間違っていなかったことを再確認することができました。エンパワーされました。

● 企画担当者のコメント

団体の岐路というのはいつの時代もありながら、特にコロナ禍が長引いていることもあり、団体からの相談は多岐にわたり、また数多く寄せられているということを実感した。その中で、コーディネーターとして大切にすることを確認することができ、とても勇気づけられた。答えは相談者が出すべきであり、コーディネーターはその灯台となりながら、一緒に旅をする姿勢であることを今後も心に留め、向き合っていきたいと感じた。

● 企画担当者

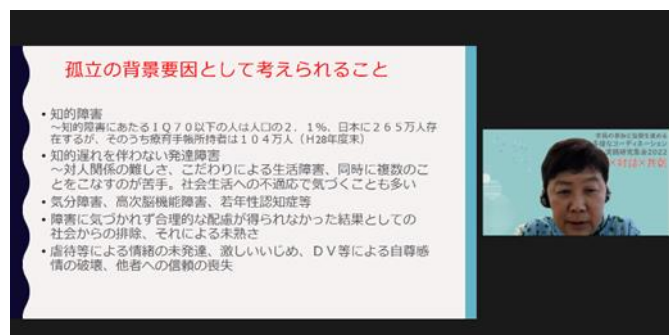
小原宗一（北区社会福祉協議会）/開澤裕美（中央大学ボランティアセンター）
/熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

C1

【つなぐ】

～制度のスキマを埋める～

断らない相談支援の現場で、日々さまざまな相談に対応する中から見える相談者の特徴的な状況として、生活のしづらさを抱え、解決をあきらめ、地域社会や家族から孤立している状態があげられます。複合化した問題は制度の狭間にあることも多く、自組織のもつ機能だけで支援するには限界があり、「つなぐ」ことが重要な役割を果たします。この分科会では、「つなぐ」をキーワードに、どう「つなぐ」のか、また、「つなぐ」ために必要なことは何か、「孤立をつくらない」コーディネーションの役割を考えます。



● 登壇者

朝比奈 ミカ さん（千葉県・中核地域生活支援センターがじゅまるセンター長）

[つなぎ手]

熊谷 紀良 さん（東京ボランティア・市民活動センター）、

三田 響子 さん（相模原市社会福祉協議会）

武藤 祐子 さん（千代田区社会福祉協議会）

● タイムスケジュール

- 09:30 開会・オリエンテーション・趣旨説明
- 09:45 セッション1「相談現場でいま起こっていること」
- 10:25 セッション2「つなぐ」実践について
- 10:50 セッション3 ブレイクアウトセッション（グループワーク）
「つなぐこと・コーディネーションの新たな視点」
- 11:20 グループワーク発表・共有・質疑応答
- 11:55 まとめ・事務連絡

● 参加者数

27 名

● 分科会の内容

オープニングで企画趣旨や分科会のすすめ方、「つなぐ」ことへの課題意識の共有を行った。前半は「断らない相談」の現場で起きていることや支援者の視点を学び、後半は「つなぐ」実践をもとに、グループワークでの参加者同士の気づきの意見交換や全体共有により、「つなぐ」コーディネーションに必要な視点を深めた。

1. 「相談支援の現場から」～登壇者の取り組みと相談支援の最前線で起きていることを学ぶ～

中核地域生活支援センターの紹介と、特徴的な相談ニーズの状況、孤独の背景要因として考えられること等をお話いただき、問題解決の「プロセスによりそう」重要性、そのためには、言語化、社会化されない「困りご

と」が持ち込まれやすい相談支援の仕組みが必要になることを学んだ。

また、縦割りで見ると問題に気づかない、「子どもでも障がい者でも高齢者でもない人」は支援の対象として認識されない、支援の手段がない等で問題が社会化されないだけで、生活課題自体は以前からずっと存在していたことを共有。私的領域に公的支援が必要になり、地域の中に家族、親せき、友達のような「つながり」をあえて作る必要がでてきた現状を認識した。

2. 「つなぐ」実践について～登壇者の事例から「つなぐ」ために必要な視点とは？～

「つなぐ」実践について、6つの事例が紹介された。事例を通じて、「人はいろいろな顔を持って生活していること」、「紹介の仕方でも周囲の目も変わることに」、「本人（当事者）は他者を動かす力を持っていること」、「出会いや気づきは仕掛ける側の想定を超える」など、コーディネーションの視点やそのプロセスで生まれる、本人だけでなく、周囲の人（地域住民）の変化が孤立をなくす地域づくりにもつながることをあらためて認識した。

3. ブレイクアウトセッション「つなぐこと・コーディネーションの新たな視点」と全体共有、質疑応答

<参加者から出された意見（抜粋）>

- ・越境するということは、色々な市民と出会える。それを探し、つながる必要がある。
- ・「（地域には）できれば良い仕事をしたいと思っている人は多くいる」、わかってはいたができていなかった。
- ・事例のような地域の事業者（不動産屋）や市民が出てくる場、活躍していく場をどのようにしていくか？
- ・人はいろいろな顔をもっていて、一面ではとらえきれない。つながりをつくっていくことで、新たなその人自身が生まれていくということ、いろいろな可能性があることを感じた。

4. まとめ・参加者ひとりひとりが発信するひとこと「孤独をなくすために、明日から私はこうつなぐ！」

「つなぐ」コーディネーションを深めるために必要なコーディネーターの姿勢、コーディネーター自身が本人や地域をどう見るか、思いこみに気づき、視点をどう広げることが問われることをあらためて共有した。最後に、「孤独をなくすために、明日から私はこうつなぐ！」をテーマに、参加者からチャットで発信してもらった。

● 参加者の声

- ・あらためて、つなぐ考え方を考える機会となった。さまざまな背景、そこからどのようにつなぐか、視点を広げてみていこうと思います。
- ・ともに当事者になれる人を増やしていくために、自然に出会ったり、対話ができるような場をつくるブリッジパーソンになりたい。

● 企画担当者のコメント

- ・事例から紡ぎ出された「つなぐために必要な視点」に、多様な市民がつながる上でも共感できる点をたくさんみつけることができました。立場を越えてコーディネーターもつながることを考えるきっかけにも！（熊谷）
- ・支援者自身がセーフティネットを持つことで、断らない支援体制が実現できることが改めてわかりました。自分自身のつながり先をさらに開拓したいと思います！（三田）
- ・「ひとりの相談者の視点」を大切にしながら、市民の多様な関わり方やひとりひとりに合わせたつながり方をつくっていくキーワードが満載でした。（武藤）

● 企画担当者

熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター）／武藤祐子（千代田区社会福祉協議会）

[企画協力者]三田響子（相模原市社会福祉協議会）

C2

【あたためる】 あたたかい場づくりのコーディネーション 安心して失敗できる分科会

オンラインの”チェックイン”にアイスブレイクが隠れている！？それが場を和ませる要素！雰囲気づくりは何気ない雑談から醸し出されます。対面でもオンラインでも、多少の失敗を笑い合えるあたたかさ、安心して失敗できる環境は重要です。そこには”無駄”と思われる事柄もふくまれているかもしれません。オンラインの世界で、頭ではなく心を動かすためには何が必要でしょうか。その心のあたため方のコーディネーションを、密にならず、密にみんなで考え感じとる分科会です。



● 登壇者

ハンズオン！埼玉と素敵な仲間

「オンラインのあたたかい場づくり自主研究ノート」を発行した NPO 法人ハンズオン埼玉！のメンバーに素敵なお仲間を加えてお送りするスペシャルチームです！

● タイムスケジュール

- 09：30 開会、オリエンテーション、趣旨説明
- 09：45 温かい場の説明
- 10：00 オンラインでアイスブレイク
ズームでやる気チェック、メトロノーム、
目を作ろう（写真撮影）、宝物紹介
- 11：00 OTF（オンライントークフォークダンス）
- 11：20 まとめ
- 11：30 閉会

● 参加者数

36 名

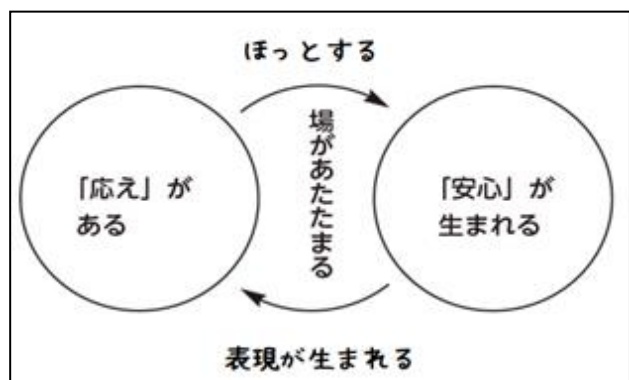
● 分科会の内容

1、あたたかい場とは？

「あたたかい場」とは、その集まりが終わったときに、参加者が「今日、参加してよかった」「集まってよかった」「また集まりたい」と思えること、主催者が「この場を開いてよかった」と思える場のことです。人がそこに集い、互いの言葉を聞き合い、やりとりする中で、なにかを試みようという気持ちが身体からの内側から湧いてくる。そんな集まりのことです

2、いきなり本の結論から！

「あたたかい場」は、「安心」から生まれる！
「安心」は、「応え」から生まれる



3、オンラインの場づくりちよいメモ（一部）

★オンラインは、うまくいなくてあたりまえ 「トライ & (安堵) エラー」

★失敗しても問題なし

オンラインは主催者も参加者も ICT（いつも、ちょっと、トラブル）です。

★チームで場をつくる

受付する人、進行する人、技術的な支援をする人、サポートする人などなど話していることに応えてくれる存在＝うなづき担当も大切です。



4、アイスブレイク代わりに

○リアクション3割増しでうなづく

最初にうなづく練習（3割増し！）それ自体が可笑しくて、笑顔に！

応える→誰かの発信を受け止めました！という反応をすることで、安心して次の反応ができる！

○TK カード（TK＝タケワキ看板）

リアクションをカードにして気持ちを表現する（アナログ・リアクションカード）

○音楽を流す

音声共有機能を使って、休憩中などのタイミングで音楽（今回は居酒屋のザワザワ）をながす

5、あたたかい場づくりの体験100連発！（失笑は世界を救う！）

○ズームでやる気チェック

内容：今日のやる気を、画面に近づいたり、離れたりして表現します。

効果：やると馬鹿らしい！失笑＝息を吐くことで、緊張が緩まり、肩の力が抜けます。

爆笑でも失笑でも、笑うことで気持ちが緩まります。

○メトロノーム

内容：モデルの方に合わせて左右に揺れます

効果：オンラインの最大の特徴はズレ！映像や音声のズレが発生します。ズレにイライラすることもあります
が、工夫して試行錯誤して、それでも一致したときは嬉しくなってしまう。

○目をつくろう

内容：紙とペンとはさみを用意して、3分くらい目を作ります。そのあと皆さんで記念撮影。

効果：手を動かすと居心地がいいです。別の場所にいますが同じ作業をしているとオンラインでも一緒にいる
気分になります。簡単に作れるかぶりもので、あたたかい場づくりの必勝（失笑）アイテム！

○私の宝物紹介

内容：自宅にある宝物を2.3分で探してきて、ブレイクアウトで宝物と一緒に自己紹介

効果：自宅から参加することが多いオンラインの良さを生かして、宝物で人柄がわかる！？

みんなの「違い」と「応え」を持ち寄ると、場があたたまります。

★参加者からでた宝物以外の「問い」

好きなおでんの具、生協（職場）のおすすめ商品、どうでもいいけど捨てられない物、

スマホの待ち受け画面、壁に貼ってあるポスター、いつも持ち歩いているもの、何故か買ったものなどなど

○オンライントークフォークダンス

内容：ブレイクアウト機能を使ったフォークダンス形式の1分間のおしゃべりタイム

1分間の中でお題について話す話し手と、聞き手は説教やアドバイス禁止で「ひたすら聞く人」に分か
れます。話し手は深く話しても浅く話してもOK、お題が難しい場合は「うーん」と答えてもOK

効果：一生懸命考えて話した内容は正解も不正解もなく、相手が受け止めてくれた！ということにあたため
る効果があります。大人と子どもでやっても、大人が聞いてくれる、否定されないという安心を保障さ
れた場では応えが生まれる。ほんの結論のような内容です。

● 参加者の声

- ・あたたかい場をつくるということを全体を通して体現しているようで、いい雰囲気でした。
- ・「失敗してもいい部屋」というテーマもよかった。
- ・主催側になる時はICTを恐れ、ワンオペで進めなくてはならない緊張感が、相手のフリーズ感を生み出してい
たのかもしれないと気づきました。

（アンケートより一部抜粋）

● 企画担当者のコメント

詳しくは、[オンラインのあたたかい場づくり自主研究ノート ver.1](#)をご覧ください。

● 企画担当者

西川正（ハンズオン埼玉！）/竹田純子（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター）

仙波愛優佳（和光市社会福祉協議会）/宮城智広（鶴ヶ島市社会福祉協議会）

C3

【提言する】

市民の声を届ける

市民から寄せられる困りごと相談のなかには、現行の制度や仕組みでは対応が難しいものが含まれる。想いのあるボランティアによって支えていくことに加え、行政に提言を行い、制度や仕組みをつくっていくことも大切である。しかし、提言活動のやり方を学ぶ機会は少なく、活発に行われていない。この分科会では、提言活動の基礎的な方法を学ぶ。加えて、先駆的な事例を知ること、各地域での取り組みにつなげていきたい。



● 登壇者

講師 関口 宏聡 さん（特定非営利活動法人セイエン 代表理事）

事例発表者 片岡 一樹 さん（尼崎市立ユース交流センター センター長）

能島 裕介 さん（尼崎市理事（子ども政策担当）・教育委員会事務局参与）

● タイムスケジュール

09:30 開会・オリエンテーション・講師紹介・課題提起

09:45 講義：

「提言に関する基礎的な理解」

関口 宏聡さん（特定非営利活動法人セイエン 代表理事）

10:55 事例発表：

「尼崎市立ユース交流センターの若者による提言活動」

片岡 一樹さん（尼崎市立ユース交流センター センター長）

能島 裕介さん（尼崎市理事（子ども政策担当）・教育委員会事務局参与）

11:30 全体セッション

12:00 まとめ・クロージング

● 参加者数

27 名

● 分科会の内容

提言活動に関する基礎的なことを理解するために、関口さんから講義が行われた。

ポイント① 多様な市民の政治参加

市民の政治参加は、選挙における投票だけという誤った認識を持たれがちである。しかし、NPO の役割のひとつに、「政策・自治への市民参画に重要な働きをする」ことがあげられる。陳情や請願、署名、政策提言など、様々な方法での政治参加があることを理解してほしい。

ポイント② 4つの政策フェーズ 良い種を育てていく

「気づく」「つくる」「やる」「なおす・やめる」という4段階がある。「気づく」というのは、政策の種であ

る。日ごろの悩みや愚痴、怒りなどのマイナス的なものや、理想を掲げこのような社会をつくっていくんだというポジティブなものも種となりえる。この種に誰かが気づいたとしても、外に発信していかなければ、政策にはなっていない。相手に伝わるもの、理解が得られるものとして、政策を「つくる」必要がある。「やる」「なおよす・やめる」は、執行段階になるので、行政が主に役割を担っていく。コーディネーターは、どの段階から関わっていくのかを考え、良い種は、政策として育ててほしい。

ポイント③ 政策提言に必要なこと

政策提言には、「ナレッジ（知識）」「スキル（提案方法）」「マインド（社会変革思考）」が必要となる。ナレッジは、知っている人に助けを求めればよく、スキルは、提言活動が続けていけば身についていく。もっとも重要なのは、よい社会をつくっていくんだという信念・マインドである。私利私欲のためではなく、公益のためであることが前提となる。

ポイント④ 政策の「サブ」をつくっていく

「サブ」というのはサブスタンス（substance、政策の内容）をさす。自分たちの政策内容によって、実現方法が違ってくる。刑罰や罰則、税制を変えていく必要があるものから、普及啓発や慣例・慣習をかえていくものなど、大きな幅がある。何を変えるとよいかを見極めて、場合によっては、自分たちで活動をスタートしていけばよいものもありえる。気づいた種をそのまま行政や政治家に届けるだけでは、政策としてつくられたものを届けていくという行程が大事になる。

■尼崎市の事例紹介（片岡さん・能島さん）

尼崎市立ユース交流センターでは、若者が課題だと思うことや不安に思うことを、市が施策として取り組んでいくために、「Up to You!（ユースカウンスル事業）」を実施。ユースカウンスルとは、若者議会や若者協議会と呼ばれ、若者が自分たちのまちをつくれる仕組みとして提言活動を行う。尼崎市の Up to You! 第0期生には、高校生 11 名、大学・専門学生 3 名が参加。スケートボードができる公園、トランスジェンダーの高校生が過ごしやすい環境など、市長・副市長・教育長に直接提言された。その過程において、若者自らが課題の背景を調べたり、市民を巻き込んだイベントを実施したり、視察に行くなど積極的な取り組みがなされている。

● 参加者の声

- ・提言活動について、わかりやすく教えていただきました。また、尼崎市の事例は、事業に込められた思いを若者と共有できているようで、感動しました。
- ・ボランティアコーディネーション力検定で学んだ際、提言という項目が難しくもっと知りたいと思い、この分科会に参加させていただきました。冒頭の政治参加の考え方から提言の仕方、アドボカシーとサービス提供の考え方など知ることができ、提言という事への理解が進んだと感じました。

● 企画担当者のコメント

コーディネーターが提言活動を行う重要性を再認識した。体系的に学ぶ機会が少ないので、敬遠されがちであるが、各地の実践事例を知り、自分たちでも行えるような仕掛けをつくっていきたい。

● 企画担当者

上田英司（日本NPOセンター）

C4

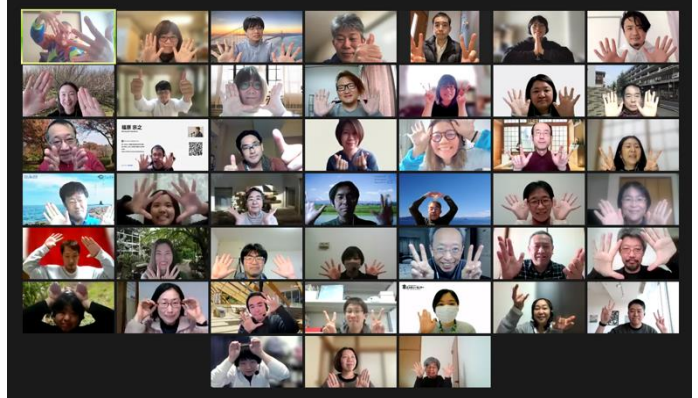
【問いをたてる】

ジブンゴトの切実な問いが 対話と共創をうむ

「問い」はさまざまな行いの出発点です。個や集団のなかで、思考や感情を刺激し、固定観念や関係性を揺さぶります。

この分科会では、さまざまな背景をお持ちのみなさんが集まり、ジブンゴトの切実な「問い」から出発し、互いの思考と問いをフラットにかさねていく、楽しく創発的な場を試しました。場をまとめるいつものやり方をあえて止め、それぞれの気づきを大切にしました。

問いや思考の重ね合いそのものが、貢献感をうみ、居場所を作り、やがて活動やビジネスが発展し、生活が豊かになっていくきっかけとなる体感を味わうことができました。



● 登壇者

コラボレーション：議論メシ のみなさん

「議論メシ」は『ライフピボット』著者 黒田悠介さん主宰の、問いでつながるコミュニティ。メンバーが立てたジブンゴトの問いのもとに集まり議論するのがメインの活動です。年間 200 以上のテーマで対話の場が開かれる、4 年以上続くオンラインとオフラインとメタバースの総合型コミュニティです。

<https://www.gironmeshi.net>

● タイムスケジュール

- 09:30 オリエンテーション、コラボレーション紹介、チャット練習
- 09:42 GOOD・BAD・QUESTION, 感想の共有
- 10:12 問いのたて合い、投票
- 10:27 本日の問いの決定・問いのオーナーからの話
- 10:32 問いについて対話①, 全体共有, 小休憩
- 11:08 問いについて対話②
- 11:36 自分なりの気づきの共有, 問いのオーナーから感想
- 11:43 雑炊タイム
- 11:55 記念撮影, グラレコ紹介, 挨拶
- 12:06 ブレイクアウトルームに分かれ, 流れ解散
- 12:30 放課後タイム終了

● 参加者数

47 名

コーディネーター 31 名
議論メシ 16 名

☆下線なし…全体ルーム

下線あり…ブレイクアウトルーム

● 分科会の内容

1. GOOD・BAD・QUESTION

最近あった、良かったこと、悪かったこと、疑問におもうこと を数分間黙考し 書き出した上で、3～4人のブレイクアウトルームで互いにシェアし、雑談する

2. ”本日の問い”の決定

Slido にて問いをたて合い、投票、上位の問いから”本日の問い”を決定、問いのオーナーからその想いをきく

本日の問い：どうしたら意思決定時に、多様な意見を持つ人たちが、互いを尊重しながら傷つけ合わずに対話ができるのか？

3. 問いについて対話①②

数分間黙考し書き出した上で、3～4人のブレイクアウトルームで互いにシェアし、短いパス回しをしながら考えや問いを重ねていく グループでの結論よりも自分なりの気づきをもってかえることを大切にする

★グラドルール★

- ・参加者の皆さんの意見を尊重する姿勢をもちましょう

- ・自分と違う意見が出て否定はしないようにしましょう
- ・つい話し過ぎちゃうことがあります、長くても1分くらいになるようにしましょう
- ・短いパス回しを意識しましょう
- ・みんなが平等に意見を出し合える場にしましょう

4. 自分なりの気づきの共有

全体ルームのチャットに自分なりの気づきを書き合う チャットは保存してもちかえる 問いのオーナーから感想をきく

5. 雑炊タイムの設定

さいごにブレイクアウトルームで雑談する時間をとる 対話でよい出汁が出た後に楽しむ”雑炊タイム”



● 参加者の声

- ・議論の前のグランドルールは大切ですね。それって、本当に今、意思決定する内容かも確認することが大事。
- ・前提情報や条件のフラット化の努力が意思決定においても非常に大切。また、それぞれの多様性が認められている感覚も大事。
- ・今日のディスカッションを通じて、議論ってなに？どんな思いで何を決めたいの？という前提を話し合うこと自体を共有することも大事ななと思いました。
- ・今日のように、グランドルールを設定する、共有することは大切だなと思いました。地域や社内、いろいろな会議の場でやってこなかったなあと。それから、発言する前に、それぞれが考える時間をとることもだいじですね。
- ・自分への戒めとして、議論との人間性を切り離す。今日出たアイデアをもとに、話を聞いてくれる人に会議の机の形を提案。
- ・議論の場で「傷つく」というのが不思議、意見と人間性が必ずしもイコールではない、人間性は否定してはいけなくとも意見をぶつけ合うことが意思決定では大切では、というお話を聞いてうんうんと頷きました。
- ・「まるい会議」といわれるように、何を発言しても大丈夫、安心な場づくり...ファシリテーションやグラレコ、グランドルール。こういうことが広がってくると、少しずつ変わってくる期待。違う考えを持っていることは当たり前。違う意見を言われても、それはその人を否定されたということではない、ということを通感認識として持てるようになるといいとおもいました。

● 企画担当者のコメント

意見を重ね合わせることは貢献感につながると感じ、みなさんとその体験をしたい！という想いでこの分科会を企画しました。私も一参加者として対話することができました。温かい場を創り上げてくださった参加コーディネーターのみなさん、議論メシのみなさんに、感謝の気持ちでいっぱいです（藤掛）

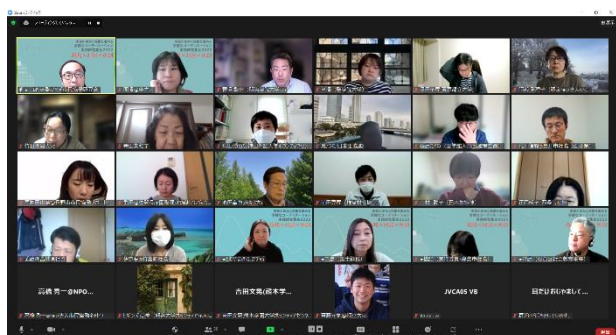
● 企画担当者

遠山昌子（生き方のデザイン研究所）/ 藤掛素子（明治大学ボランティアセンター）

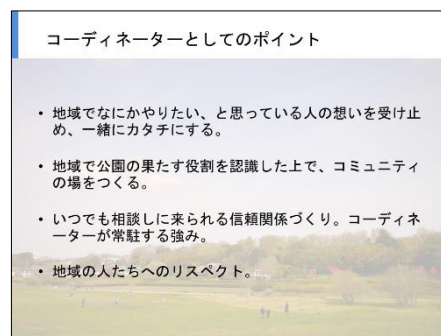
活動に埋め込まれた「学び」の実践を振り返る

市民の参加と協働を促す活動の現場において、活動者の口からしばしば発される「たくさんの学びがありました」という言葉。また、主催者がこの言葉を聞くと、自分が提供したプログラムに対する評価として受け止めるきらいがありますが、本当にそれでいいのでしょうか。

この分科会では、活動プログラムで生まれた活動者とコーディネーターそれぞれの偶発的な学びや予期しない好ましい変化に着目します。話題提供者が振り返る実践事例を参考にしつつ、参加者自身もこれまでに提供した活動プログラムを振り返る内容を展開します。



分科会の様子



発表資料(矢島)

● 登壇者

話題提供者 開澤 裕美 さん（中央大学ボランティアセンター コーディネーター）
 話題提供者 齋藤 尚久 さん（杉並区教育委員会 社会教育主事（社会教育士））
 話題提供者 矢島 万理 さん（国土緑化推進機構）
 学び手 遠山 昌子 さん（生き方のデザイン研究所 コーディネーター）
 進行役 土崎 雄祐 さん（とちぎ市民協働研究会 専務理事）

● タイムスケジュール

09:30 開会、事務連絡（オリエンテーション）、趣旨説明
 09:35 意見交換(1)グループで自己紹介
 09:45 話題提供(1)公園での取組〈矢島さん〉
 09:50 学び手から話題提供者への問いかけ
 09:55 話題提供(2)社会教育センターでの取組〈齋藤さん〉
 10:00 学び手から話題提供者への問いかけ
 10:05 話題提供(3)大学ボランティアセンターでの取組〈開澤さん〉
 10:10 学び手から話題提供者への問いかけ
 10:15 意見交換(2)グループで3つの事例について感想等の共有
 10:35 意見交換(2)のふりかえり、3つの事例のポイント整理
 10:50 休憩
 11:00 意見交換(3)グループで参加者自身の偶発的な学びや好ましい変化に関する事例の共有
 11:20 意見交換(3)のふりかえり

● 参加者数

24名

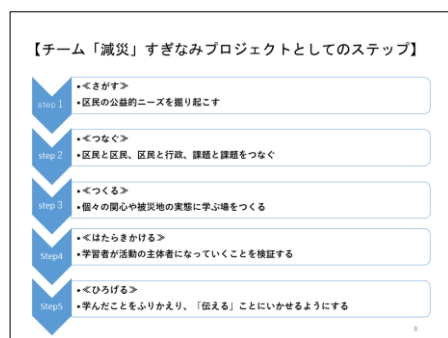
- 11:25 意見交換(4)グループで偶発性にだけ頼らない
コーディネーションの具体的な方策について検討
- 11:45 意見交換(4)のふりかえり
- 11:50 まとめ
- 12:05 アンケートのお願い、放課後タイムの案内

● 分科会の内容

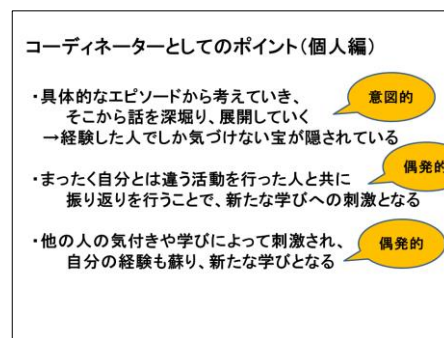
冒頭、土崎による趣旨説明の後、参加者はブレイクアウトルームに分かれてグループごとに自己紹介を行った。

次にコーディネーションの実践で生じた偶発的な学びや予想しない好ましい変化について、3人から話題提供者があった。矢島は都立公園で取り組んだ「グッドアイデア 100本ノック」や「むさしのカレッジ」について、市民の「なにかやりたい」という思いを形にするプロセスとそのプロセスにコーディネーターがどのように寄り添ったのか報告した。齋藤は「減災・ふれあいウォークラリー」について、参画した一人の活動者の変容に着目し、その活動者が地域で理解者を増やすために一緒に取り組んだ方策について報告した。開澤は大学生が参加したボランティアプログラムにおけるふりかえりの場面を取り上げ、コーディネーターの働きかけの結果として学生に生じた変化を意図的・偶発的に整理して報告した。3つの話題提供の後には遠山による「問いかけ」がそれぞれあり、「やりたい」と「やってはいけない」の折り合いの付け方、抽象的な課題を「自分事」化するための具体的な方策、偶発性を生み出すために意図的に仕掛けていることについて議論を持った。

後半のプログラムは参加者によるグループワークを中心に進行した。参加者自身の偶発的な学びや好ましい変化に関する事例を共有し、偶発性にだけ頼らないコーディネーションの具体的な方策について検討した。具体的な方策として、「自分（活動参加者）と違う考え方や背景を持つ人たちと交流する機会をつくる」「活動参加者に任せる・委ねる部分を用意しておく」などが挙げられた。また、Google スプレッドシートを用いてワークのプロセスをリアルタイムで可視化した。



発表資料(齋藤)



発表資料(開澤)

● 参加者の声

まさに偶発的な気づきも多かった。事例の報告とグループセッションの時間的配分、議論の中身のバランスも良かったと思います。分科会において狙っていた偶発的な学びが何であったのかも知りたかったです。

● 企画担当者のコメント

計画された偶発性をどのように作り出すががコーディネーションの妙だと気づかされた分科会だった(土崎)。

● 企画担当者

開澤裕美(中央大学ボランティアセンター)/齋藤尚久(一般社団法人日本社会教育士会)

/土崎雄祐(とちぎ市民協働研究会)/遠山昌子(生き方のデザイン研究所)/橋詰勝代(高島市社会福祉協議会)

/矢島万理(国土緑化推進機構)

クロージング セッション

明日からのコーディネーションのための 振り返りと分かち合い

【越境×対話×共創】をテーマに過ごした3日間のまとめの時間。新たな学びや気づき、感じたことを振り返り、お互いの成果を共有した。

● ファシリテーター

矢島万理さん(国土緑化推進機構/JVCA 理事)

鹿住貴之さん(JUON(樹恩)NETWORK/JVCA 副代表理事)



● タイムスケジュール

- 13:30 参加者への労いとこのセッションの進め方
- 13:35 C分科会からの概要報告
- 13:55 ブレイクアウトセッションの進め方説明
- 14:00 ブレイクアウトセッション(1G:4人)
- 14:20 全体に戻ってのディスカッション～チャットへの書き込み
- 14:25 ファシリテーターからの感想
- 14:30 終了

● 参加者数

164 名

● 分科会の内容

■開会宣言とクロージングの進め方を説明

クロージングはファシリテーターの鹿住さんからの参加者への労いの言葉で始まった。実質3日間にわたり越境と対話を重ね、さまざまなことを学び、交流して、元気になったと思う。目が疲れたという方もいるだろう。

大きなオンラインセミナーになると時間が短かったり、聴きっぱなしで終わったりすることが多いが、この集会は「参加型」で、じっくり時間をとって登壇者と参加者が双方向にやり取りできるようなプログラムを多く採り入れ、議論を大切にした。越境×対話×共創が全体テーマ。オープニングでは越境ということを中心に語り合い、分科会では、Aが分野などの掛け合わせで、Bはテーマ型で対話を重ね、Cは共創していくために役立つ内容を動詞で表現した。このクロージングでは、明日からこれをしよう、これを大切に頑張ろう、という行動宣言を言葉にして持って帰ってもらいたい。

■分科会の概要を共有しよう

ファシリテーターを交代し、矢島さんからは、すべての分科会を振り返りたいところだが、時間の制約もあるので、ここではC分科会「つなぐ」「あたためる」「提言する」「問いを立てる」「学ぶ」の5つの内容を共有することが説明され、企画を担当した実行委員から4分ずつ概要を報告した。

(内容は報告書の該当部分を参照)

■越境し、対話し、共創するために

実際に行動に移すとぶつかる現実の壁を越えるために、「私は明日からこう行動したい」ということを少人数（4人程度）で話し合い、自分自身の行動指針を持ち帰ろう、ということで15分のブレイクアウトルームでの話し合いを行った。

■明日からの「行動宣言」を言葉にしよう！

ブレイクアウトセッションで話したことから、あらためて明日からやろうと思うことを各自がチャットに書き込んでいった。

<チャットへの書き込み>

直近では会議の並び方と雰囲気作り 長期的には「勝手に」地域協議会活動@コミュニティスクール／巻き込み方を工夫する、そして関わりすぎにも気をつける／交流の場づくりひとひねり。C2分科会のようにあたたかい場を／・人をラベリングしない！・よりよくもめる！・小さな対話の機会をつくり積み重ねる！／対話を諦めない／事業に生かす／・研究集会の講師をイベントで呼ぶ！・日常的な関係性の構築のために「雑談」「余白」を大切にする／対等な関係を創るのは難しいけど、きっと明日はうまくできると信じる／越境します。はみ出します／適切な自己開示。たくさんしゃべる！／ボランティアのクリエイティビティを見つめなおす／集会に参加しつつ、団体としてウクライナの件で緊急声明を作り、また「難民鎖国ニッポン」を読了。とにかく行動だ！！と思っています／ささやかでも愛を込めます／職員ともっと自由に発言しあうようにします／越境する はみだす 活動の見える化／相手の力を信じる、信じて任せる、思いを引き出す／できるところから取り組みます！地味な作業も楽しみます／肩から力を抜いて自主性を信じて黒子に徹します／若手スタッフの支えになりたいです／自己理解と適切な自己開示／ラベリングをしない、させない、でも許す／大きな組織こそ、小さなコミュニティやつながり的大事にすることを広げていきたい（ファシリテーション講座もやるぞ！）／目の前のことを一歩ずつ まず歩く 歩きながら考える／互いの強みを理解し、対等な関係で共創します／人の話をよく聞く／越境して 連携の第一歩 お互いに困っていることを伝え合う／事業報告に偶発的コーディネーションと意図的コーディネーションを整理して記入しておく。あと、参加したくなるオンライン交流会の模索／今回とても勉強になったことをまずは自分の職場の人へ伝えていきたいと思います／対等な立場での議論の構築。たくさんの方の案やヒントをいただきました ^ ^／相談者を評価しない。友達の相談を受けてるような気持ちで一緒に考える！／特定の分科会ではないのですが、日本でこんなに頑張っている皆さんがいらっしゃることを知って、社会課題とか高齢化とか恐れるに足らずと思いました。明日からも明るく頑張る／小さなグループでつなぐ、個別の声掛けを大切にする／井の中の蛙であることの自覚を持って、人と向き合う／意見と人間性を切り離して話を聞く／オンラインの壁を超えて、さらに交流を深められるために、名刺交換にもなりバーチャル背景（QRコードつきなど）を作っておこう！／壁を作らず、線を引かず、受け止める／ノックする／話の本筋とはずれている、でも正しい意見で無視できない場合でもまずは「そうくるか！」と受け止める！／ふりかえりの時間を大切に／自分の持っているパワーに自覚的であること／人は誰も多面性がある、あるところでは強みを持っている。そこにフォーカスして、その人の抱えている問題・事柄についていっしょに考えていきたい／学生を支える、サポートするというよりも一緒に遊ぶ、楽しむ、成長するように意識付けする／伴走者として、一緒に考える姿勢で取り組みます。話しやすい場づくりの工夫をします！／地域や職場に対話の生まれる温かい場づくりをします！／ラベリングせず、力を入れすぎず向き合う／支援臭が強いことに気づいた。意見と人間性は違うと思う／失敗を恐れず、安心できる環境を作る／失敗を恐れず、目の前の人と向き合って対話し、コーディネーションしていける人になる！／人をラベリングしない。様々なアンテナを張れるように動く／やっていることが目的化するのではなく、やっていることのその先をしっかりと見据えて取り組んでいく／コロナ禍を言い訳にしない。まず、話し始める／地域の人、対象者、関わる全ての人の力を信じる／「越境志向」ですが、最近跳ね返される場面に直面しているので、これからより越境します。「越境」は組織の壁、部署の壁、セクターの壁に跳ね返されがちですが、「越境」を阻む壁を乗り越えることで、解決できることがたくさんあると思います／偶発的な学びを誘発するような、意図的な課題を考える／あんしん居場所 県を超えてシニアのオンライン交流

学生×シニアのオンライン交流／支援する側と、される側。ボランティアをする人、ボランティアをしてもらう人という見えない壁を越えて、文字通り「越境」し、そして「対話」し「共創」していきたいです！／政策提言する場合は内容と方法をわけて整理する。例えば肉のような材料の提供ではなく、提言内容をまとめたラーメンのような成果物を提供していく。難しいことを単純化、簡素化するのではなく、学ぶ姿勢が大切／相手のチカラを信じる。信じる根拠を自分の中に持つ／楽しみながら、でも目的はしっかりとって関わりたいです／ゆるくあたたかく、楽しむ。はみ出す。チームで／「つながる」ことをあきらめない。チャンスを見逃さないようにします／受援力を身につけたい。何かできると思わない。一緒に考える／C分科会でも書きましたが、「つなぐ・つなげる、つなげたいと思っていただける私になりたい！」今般たくさんの方々とお会い出来ました。これから何かあった時に頼れるかな～／あたり前に使っている「言葉」も、丁寧に対話を通じてその意味を共有した上で、次の議論・行動につなげていきたい／「支援する」ではなく「一緒に考える」を大事にする。答えは現場に、その人の中にある／ファシリやコーディネーターは一人が担うんじゃなくて一人ひとりが機能として持っているのが理想 コーディネーターよりプロデューサーやマネージャーをめざすのかな？／異分野・異文化だけ同じ匂いのする人を地域で発見する／すべての分科会でさまざまなオンラインツールを体験・知ることができました。学生スタッフとのオンラインミーティングでいろいろ活用してみて、使いやすいツールを見つけたいと思います／今やってることはそんなに間違っていないのかな？と肯定していただいたように感じて、明日からもがんばろ～って思いました／様々な境目に気づいてこそその越境。そういった意味合いで、境目なんて気にしない！／間に立つ立場として、板挟み上等、板挟みからの創造、を心がけます！／楽しむ、安心、対話する／共に学び、誰かと贈り合う／自分たちの地域をどうしたら良いのか、じっくり対話。周りのチカラを信じてたくす／越境＋ネットワークを広げて、災害の備えに取り組みます／もっとも参加をいざなう めざす市民社会。いざ、NOW！／今までも勘や経験に頼ることなく、枠を超えたコーディネーションをしたいと思います／一人ひとりのやりたいが実現できる佐賀に！地域が自走できるよう環境整備。国籍、年齢、性別関係なく多様な人材が活躍できる場をつくりたい

● 参加者の声

- ・自分が参加していない分科会の話も聞けて、有難かったです。ブレイクアウトルームの時間、もっと長くほしいなと思うくらい感想があふれていました。
- ・明日からどーしよう、ということも含めて参加者の方と学んだこと感じたこと等を共有できた。また、悩みについてもアドバイスなどいただいた（＾＾）。今後も是非つながりを持てたらと思います。
- ・全国に仲間がいるのだという心強さを感じる反面、現場に戻ると…というこわさも感じています。学ぶことで強くなれる、ということを感じることも大事なと思いました。分科会もですが、ただ、話を聞くのではなく、対話のあるプログラムがとても魅力的でした。次回こそは、対面が叶いますように。

● 企画担当者のコメント

- ・オープニングで話された「小さくてバラバラだからこそデカイ」。それぞれの「参加と協働」を進める取り組みは小さいかもしれないが、今回の学びとつながりを、今後の実践に活かしていただければ幸いである。
- ・3日間どのプログラムも、様々な分野や立場の参加者同士が、越境し、対話し、共創するための時間になっていたことを改めて感じた。自分が参加していなかった分科会の話や、全国各地からの参加者との対話の時間が、次の日からのエネルギーになっていたらうれしい。
- ・他の参加者の書き込みにも励まされながら3日間の成果を持ち帰ってもらえたと思う。

● 企画担当者

鹿住 貴之 & 矢島 万理 with 研究集会事務局（後藤 麻理子）

■前夜交流会・参加者交流会

交流会では、交流のきっかけとなるテーマでブレイクアウトルームを設け、ご自身で好きなテーマの部屋を選ぶというスタイルで実施しました。

●前夜交流会

日時：2022年2月25日（金）19：00～21：00

第一部	参加人数	第二部	参加人数
研究集会ビギナーのための部屋	6	研究集会ビギナーのための部屋	6
JVCA の部屋	4	ご当地自慢の部屋	7
ご当地自慢の部屋	9	居酒屋ケンちゃん	6
居酒屋ケンちゃん	3		
スイーツ好きの部屋	4		
メインルーム	5	メインルーム	7
合計	31	合計	26

●参加者交流会

日時：2022年2月26日（土）17：30～19：30

第一部	参加人数	第二部	参加人数
研究集会ビギナーのための部屋	6	研究集会ビギナーのための部屋	6
多文化共生の部屋	10	小原麦酒醸造所	8
環境系の部屋	3	若者とコラボしたい！部屋	9
ご当地自慢の部屋	4	行く先々で必ず迷子になってしまう人の部屋	6
JVCA の部屋	4	市区町村 中間支援組織の集い	6
TVAC(東京ボランティア・市民活動センター)の部屋	9	多文化共生の部屋	10
大阪ボランティア協会の部屋	8		
地域づくりの部屋	9		
季節料理杉浦	4		
メインルーム	2	メインルーム	2
合計	59	合計	47

●参加者の声

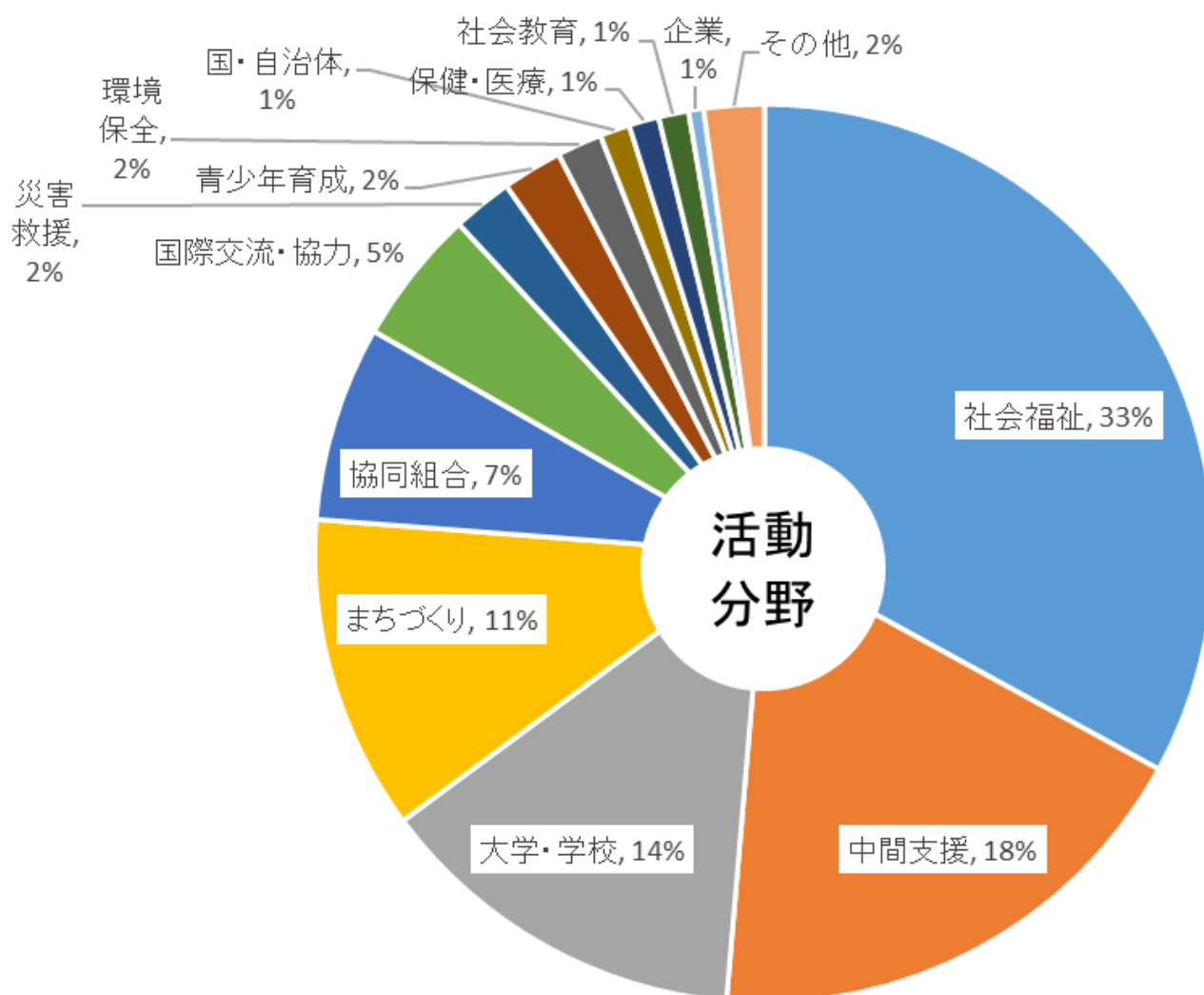
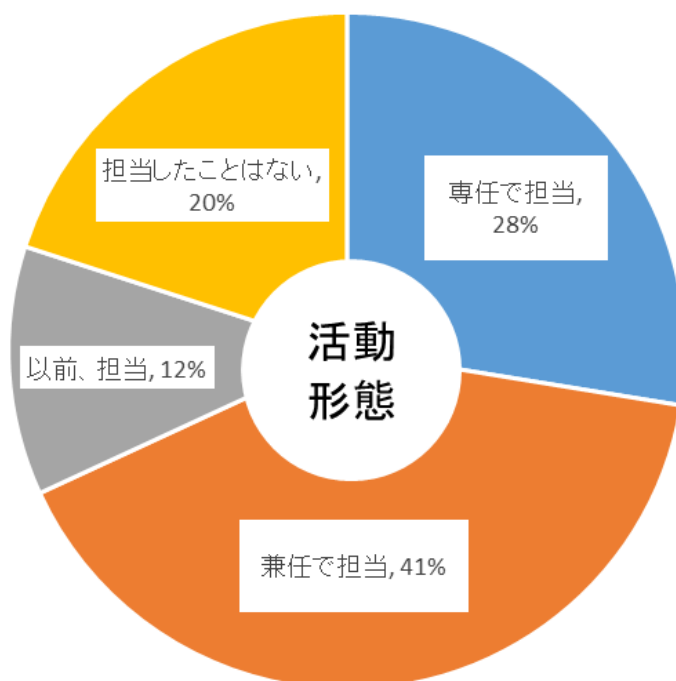
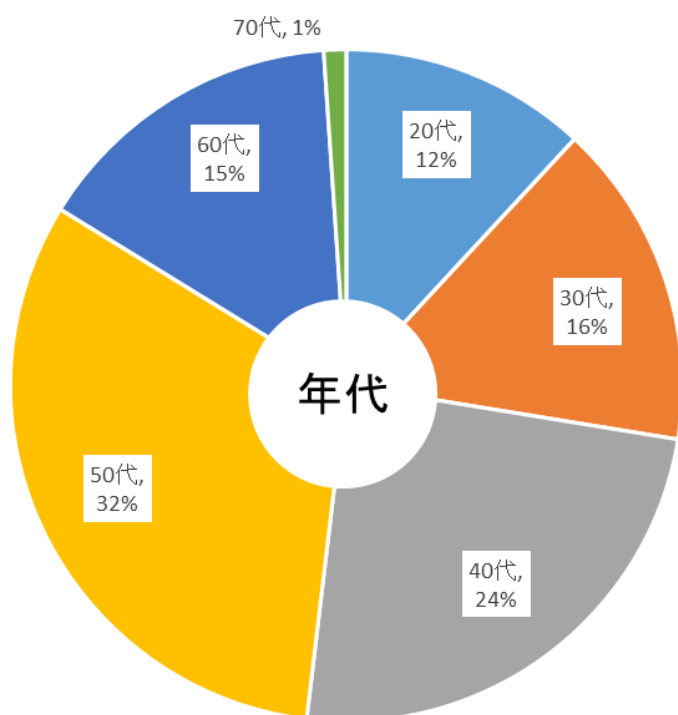
日ごろのコーディネーションの悩み事を共有したり、関心事を部屋のホストが引き出してくれ、みんなでそれについて話したりしながら、和気あいあいと和やかな雰囲気だった。

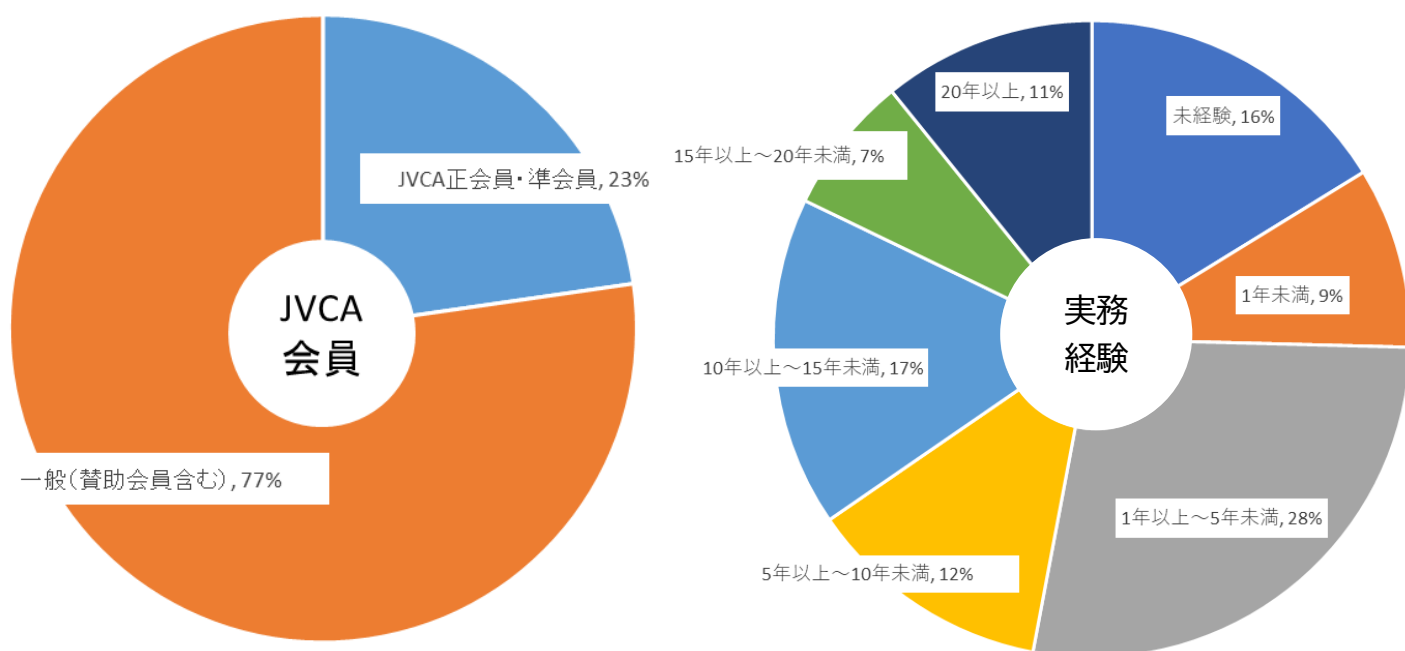
●企画担当者のコメント

真剣に学ぶだけでなく、交流会での出会いやゆるいつながりというのも、こういった集会では大切だと考え、交流会を企画しました。直接お会いすることはできませんでしたが、楽しく語らいあうことができ、充実した時間を過ごせたと感じています。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

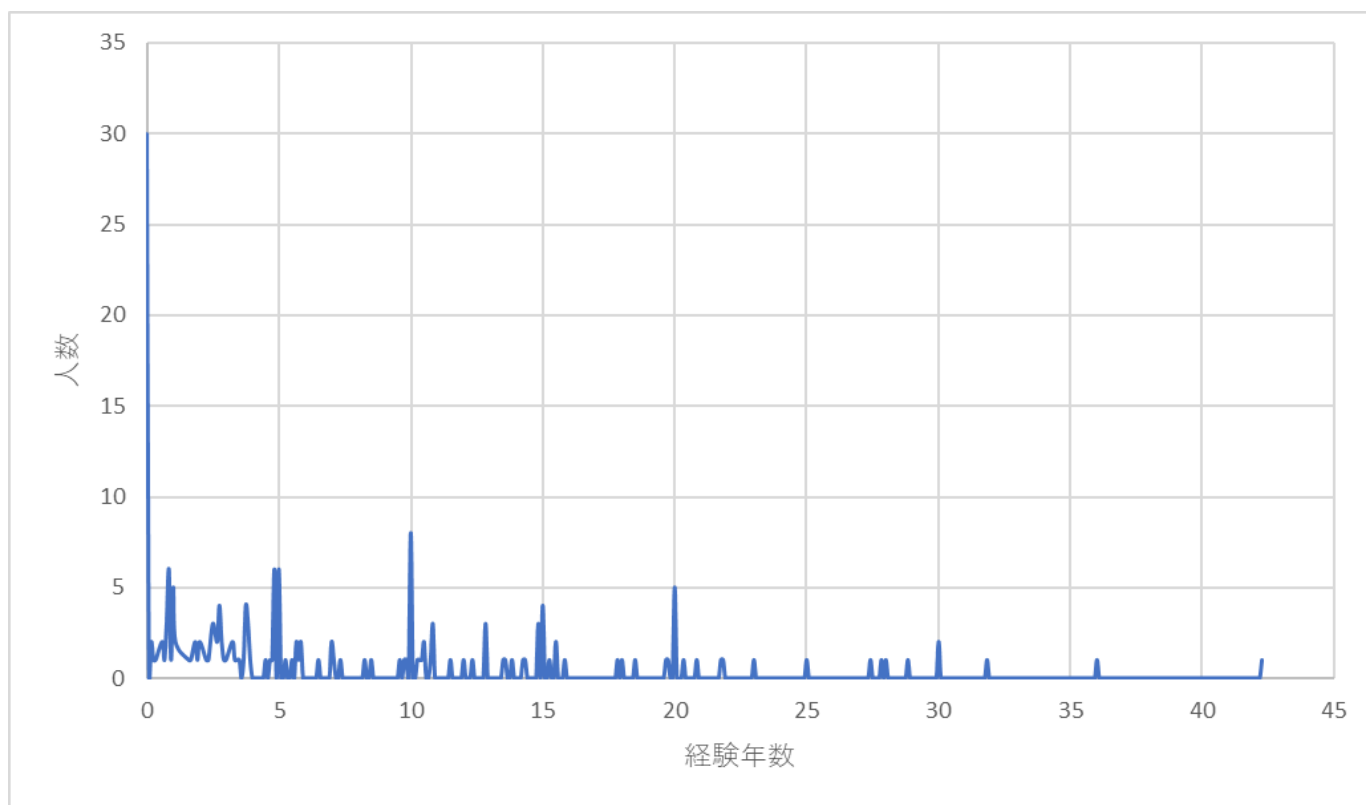


●企画担当者：JVCA 運営委員有志（國寶紗登美/佐藤匠/杉浦健/高橋義博/土崎雄祐/橋口文博/宮城智広）



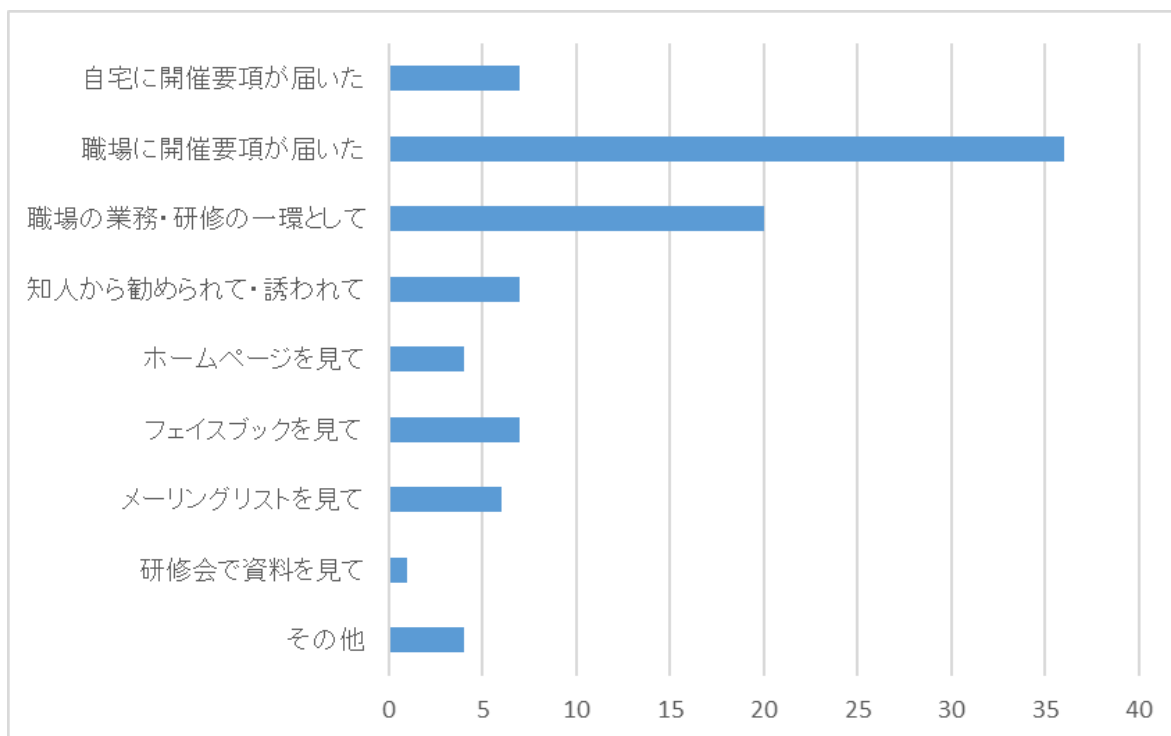


実務経験年数と人数の推移

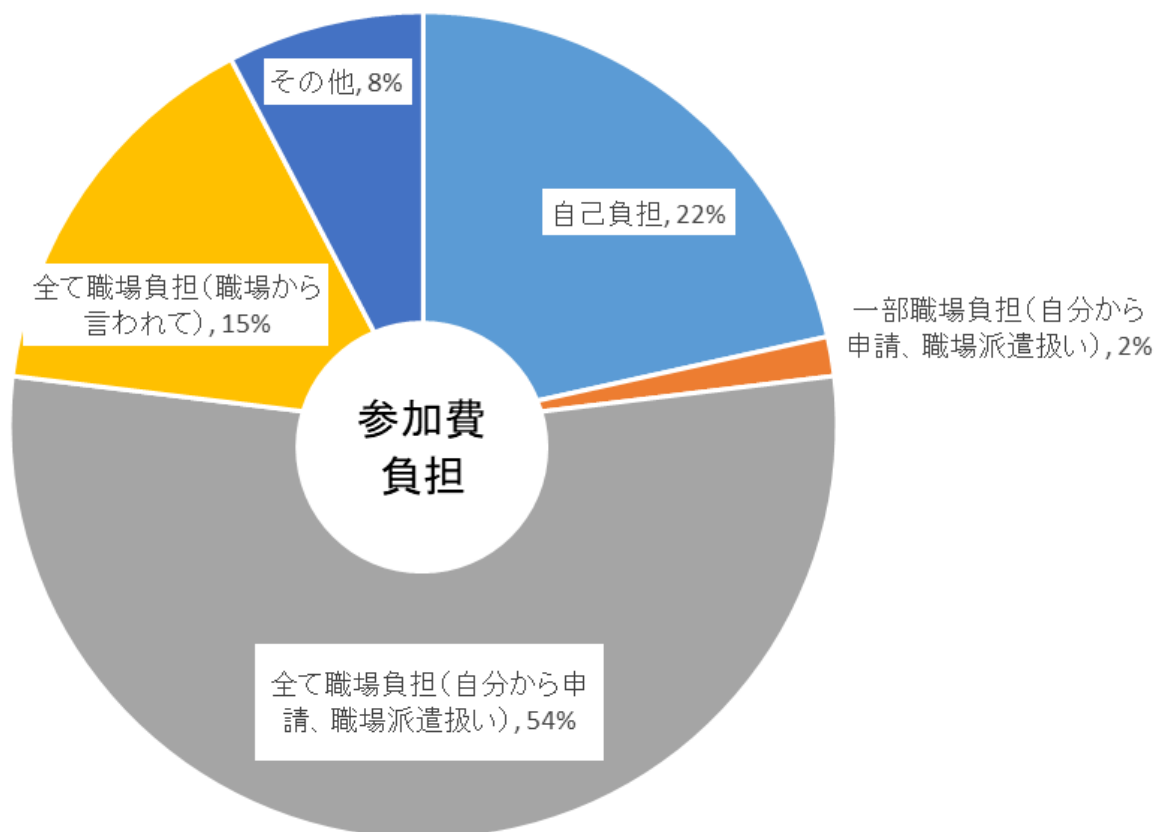


(回答数：65 人)

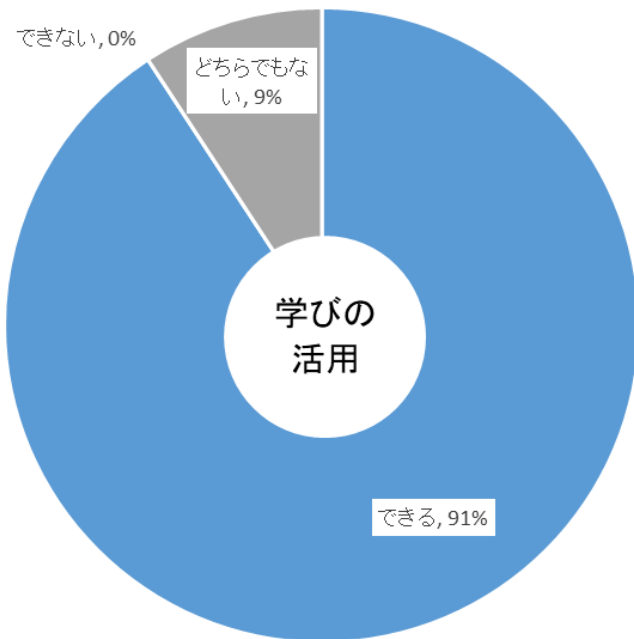
参加のきっかけ ※複数回答可能



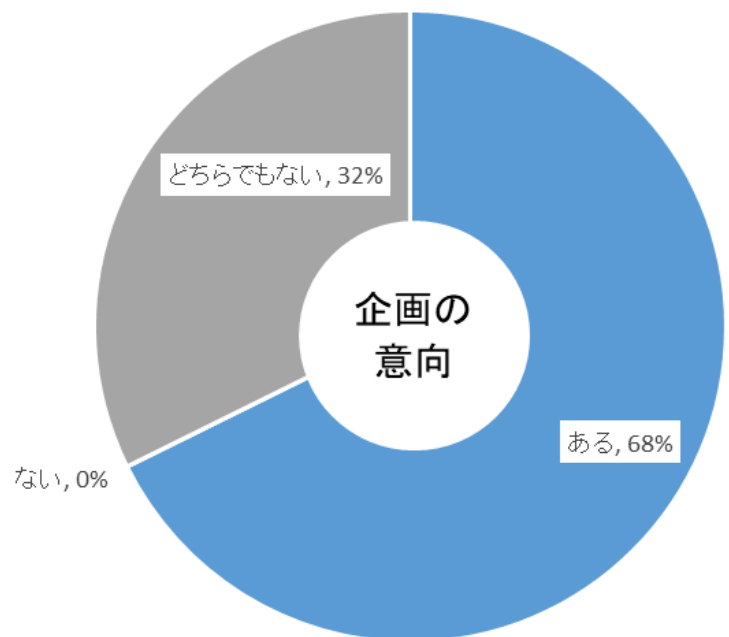
参加費の負担



職場や地域での学びの活用



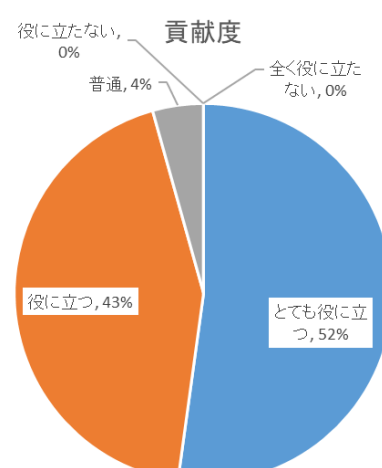
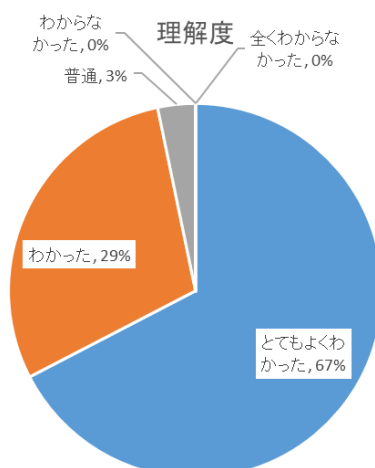
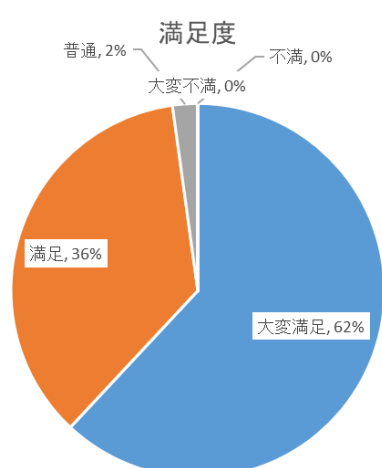
職場や地域での企画の意向



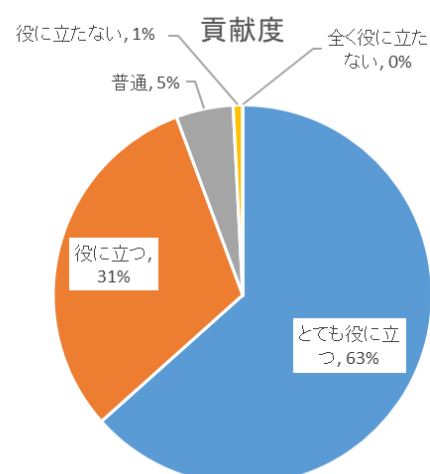
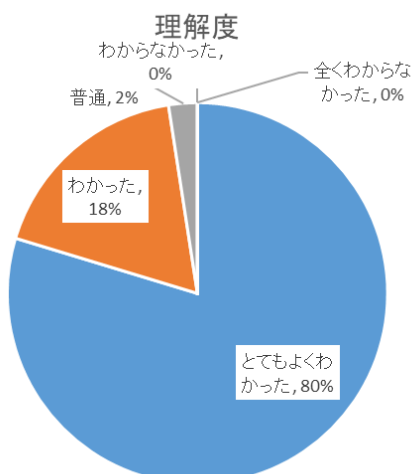
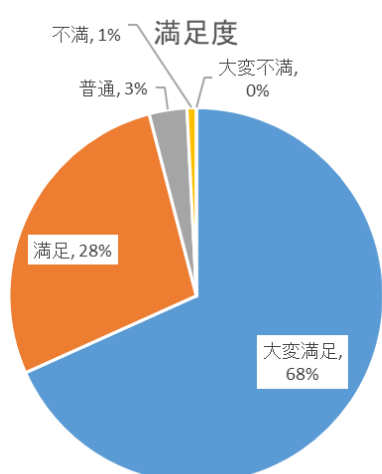
具体的な活用方法や場面（回答の一部）

- ・自分が相手をラベリングしていたこと、キーパーソンに依存しすぎていたかも？という部分の気づきになったので、関わるうえで、今以上の対話をしていこうと考えています。
- ・まずは雑談できるサロンのような場所をつくりたい。
- ・オンラインコミュニケーションにおけるあたたかい場作りや、地域×大学でのイベントなど企画していけたらと考えています。
- ・ブレイクアウトルームを活用した交流会は、さっそく真似できそうだなと思います。
- ・年齢の高い方々がまちづくりの中心におられ、若い世代に関わってほしい、担ってほしいという声をよく聞きますが、まずは若い世代の声を聞くこと、押し付けないこと、型にはめないことを伝えたい。
- ・地域でのフラットな関係づくり、住民協議会のような仕組みが今後必要なことを「布教」。住民協議会の枠組みができて「魂入れ」というか明石市のような好循環を生む空気づくりや人材育成を、コーディネーターがやれると気がついたので、地域での長期的な課題が見つかった。
- ・重層的支援体制整備事業の中で、一時的に雨風しのげる家を提供できないかと考えています。A1 分科会でのひとのまの話、B4 分科会での市民との協働の話、C3 分科会での提言の話、全てを踏まえて市民や行政と一緒に計画を進めたいと思いました。
- ・C5 で活動には振り返りがとても大切だということを学ばせて頂きました。研修会などでは、振り返りのために新たにみんなに集まってもらうのは難しいのですが、掲示板などを利用して社協にふらっと寄ってもらった時に振り返りができるような仕掛けを設けたり、団体で一年の振り返りをする時についでに研修会の振り返りもできたらいいなと思いました。

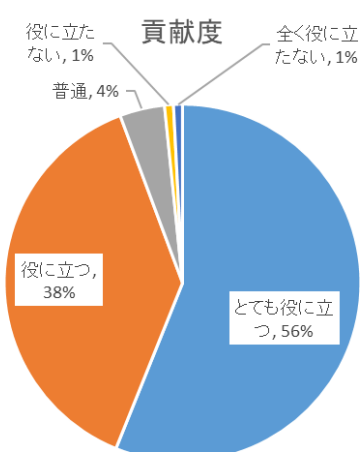
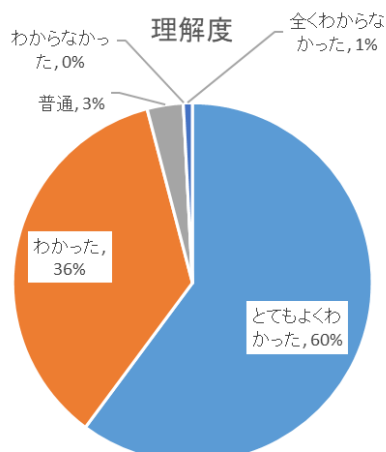
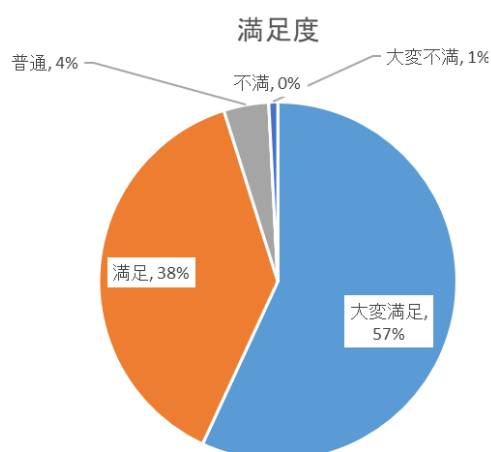
各セッションの満足度、理解度、学びの貢献度 オープニングセッション



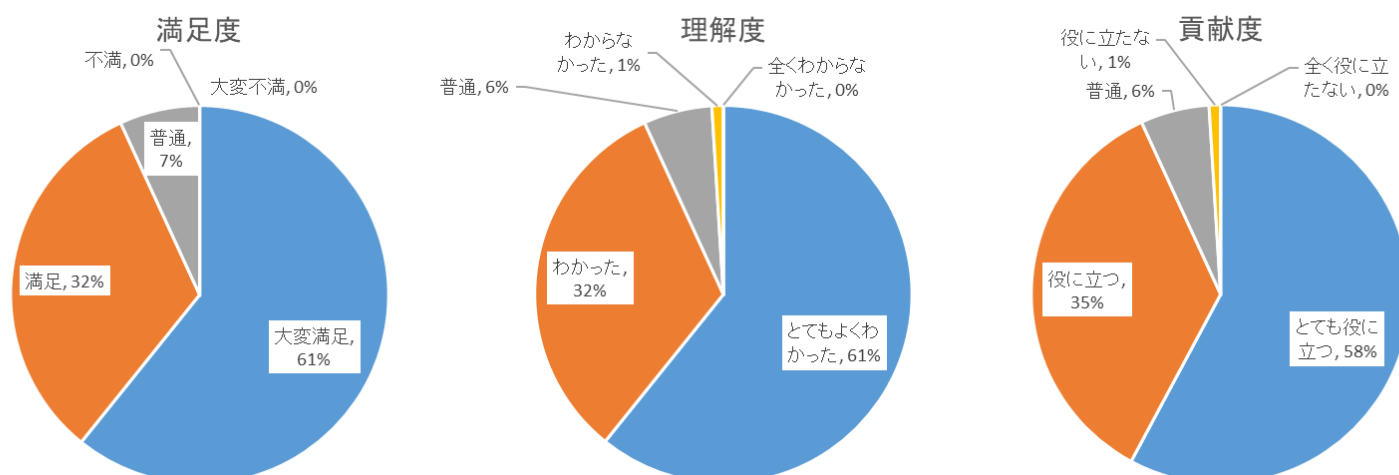
A 分科会



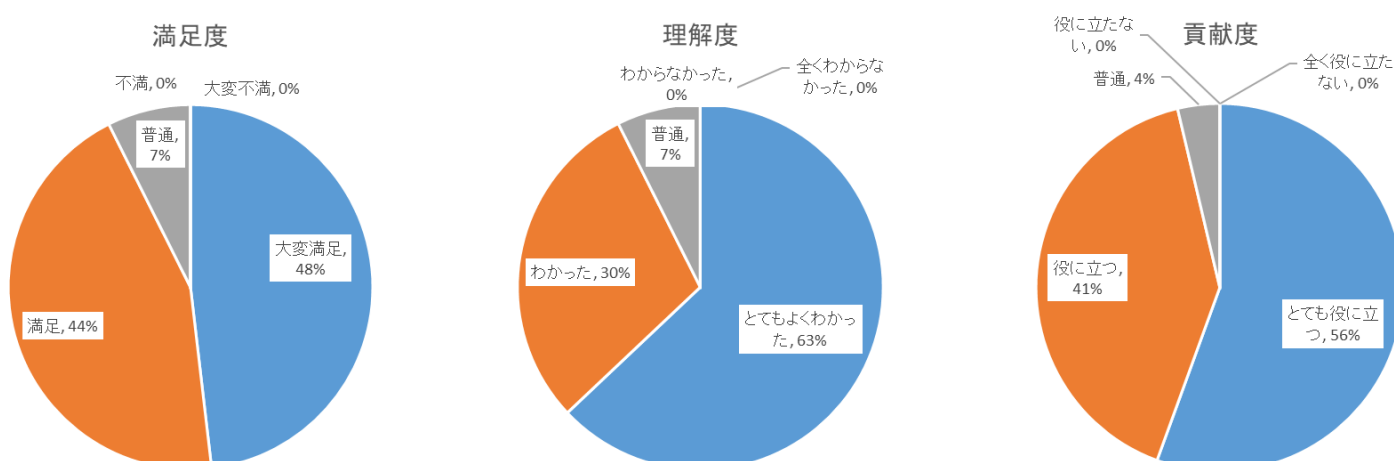
B 分科会



C 分科会



クロージングセッション



特に印象に残ったセッションや報告内容、登壇者の言葉（回答の一部）

- ・私が参加したすべての所で、人にレッテルを張らないという話が出てきたのがとても印象的でした。
- ・オープニングセッションで西川さんがお話していた『困りごとは人が集まるチャンス』という言葉です。今まではただ困っていただけだったので目から鱗でした。
- ・相談者の懐中電灯になる、聞いて聞いて聞いて…ひたすら聞く、相手の言葉を深堀する
- ・A1 宮田隼さん（コミュニティハウス「ひとのま」）、「友だちとしてできることを考えた。家借りて、開けているだけ。それが居場所といわれる場所になった。」
- ・B1 分科会で、登壇者の方の「いつ芽が出るかわからない」けれどその人自身、あるいはその体験の力を信じること。30年後に芽が出ることもあるという言葉が印象に残りました。
- ・「共存」と「共生」、「よりよくもめる」、外国人の方たちを国の代表のようにとらえてしまっていることに気づきを得、ひとりの人として接してくことを再確認できた。

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会2022 実行委員名簿

No	氏名	所属	No	氏名	所属
1	足立 陽子	東京都人権啓発センター	18	遠山 昌子	生き方のデザイン研究所
2	上田 英司	日本NPOセンター	19	西川 正	ハンズオン！埼玉
3	小原 宗一	北区社会福祉協議会	20	橋詰 勝代	高島市社会福祉協議会
4	開澤 裕美	中央大学 ボランティアセンター	21	早瀬 昇	大阪ボランティア協会
5	鹿住 貴之	JUON(樹恩)NETWORK	22	疋田 恵子	杉並区社会福祉協議会
6	菊池 哲佳	多文化社会専門職機構	23	藤井 美香	横浜市国際交流協会
7	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	24	藤掛 素子	明治大学ボランティアセンター
8	栗原 穂子	ぼらんたす	25	松尾 慎	東京女子大学/Villa Education Center
9	齋藤 尚久	日本社会教育士会	26	宮城 智広	鶴ヶ島市社会福祉協議会
10	佐藤 正枝	日本社会福祉士会	27	明城 徹也	JVOAD
11	佐藤 美恵	ぼらんたす	28	武藤 祐子	千代田区社会福祉協議会
12	杉浦 健	共働プラットフォーム	29	文珠 正也	日本協同組合連携機構(JCA)
13	仙波 愛優佳	和光市社会福祉協議会	30	矢島 万理	国土緑化推進機構
14	園崎 秀治	Office SONOZAKI	<事務局>		
15	竹田 純子	龍谷大学 ボランティア・NPO活動センター		後藤麻理子	日本ボランティアコーディネーター協会
16	薦 直宏	日本生活協同組合連合会		神保 彩乃	日本ボランティアコーディネーター協会
17	土崎 雄祐	とちぎ市民協働研究会		石川 陸矢	日本ボランティアコーディネーター協会

実行委員会 開催実績

回	開催日	開催方法	主な協議内容
準備会	2021年 5月21日(金)	オンライン	実行委員会の人選、依頼内容、役割分担等
説明会	6月22日(火)	オンライン	初参加者へのオリエンテーション
第1回	7月17日(土)	オンライン	開催趣旨の確認、現場の課題出し等
第2回(A)	8月 4日(水)	オンライン	問題意識の整理、分科会テーマ等の抽出
第2回(B)	8月 6日(金)	オンライン	問題意識の整理、分科会テーマ等の抽出
第3回	9月 5日(日)	オンライン	分科会企画のプレゼンテーションと協議
第4回	9月23日(木・祝)	オンライン	分科会企画のプレゼンテーションと協議
第5回	10月 3日(日)	オンライン	分科会企画のプレゼンテーションと協議
第6回	11月 3日(水・祝)	オンライン	全体の枠組み確定とオープニング企画
第7回	11月22日(月)	オンライン	開催要項の確定、広報戦略の策定
第8回	12月15日(水)	オンライン	広報対策と役割分担、その他のタスク確認
第9回	2022年 1月15日(土)	オンライン	追加の集客対策、当日までの段取り確認
第10回	2月 5日(土)	オンライン	各分科会の進捗確認、クロージングの進め方協議
第11回	3月19日(土)	オンライン	研究集会の振り返り、アウトプットの方法等

協力

公益社団法人日本社会福祉士会
日本生活協同組合連合会
特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JVOAD)
一般社団法人多文化社会専門職機構 (TaSSK)
東京ボランティア・市民活動センター
社会福祉法人大阪ボランティア協会
特定非営利活動法人ハズオン! 埼玉
一般社団法人生き方のデザイン研究所
特定非営利活動法人ぼらんたす

後援

社会福祉法人全国社会福祉協議会 社会福祉法人中央共同募金会 認定特定非営利活動法人日本NPOセンター
認定特定非営利活動法人国際協力NGOセンター 公益財団法人日本YMCA同盟 一般財団法人自治体国際化協会
一般財団法人児童健全育成推進財団 一般社団法人環境パートナーシップ会議 ESD活動支援センター
認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会 特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会2022報告書

発行日 2022年3月31日

発行者 特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会

東京都新宿区神楽坂2丁目13番地 末よしビル別館30D

TEL 03-5225-1545 / FAX 03-5225-1563

Email : jvca@jvca2001.org

URL : <https://jvca2001.org/>